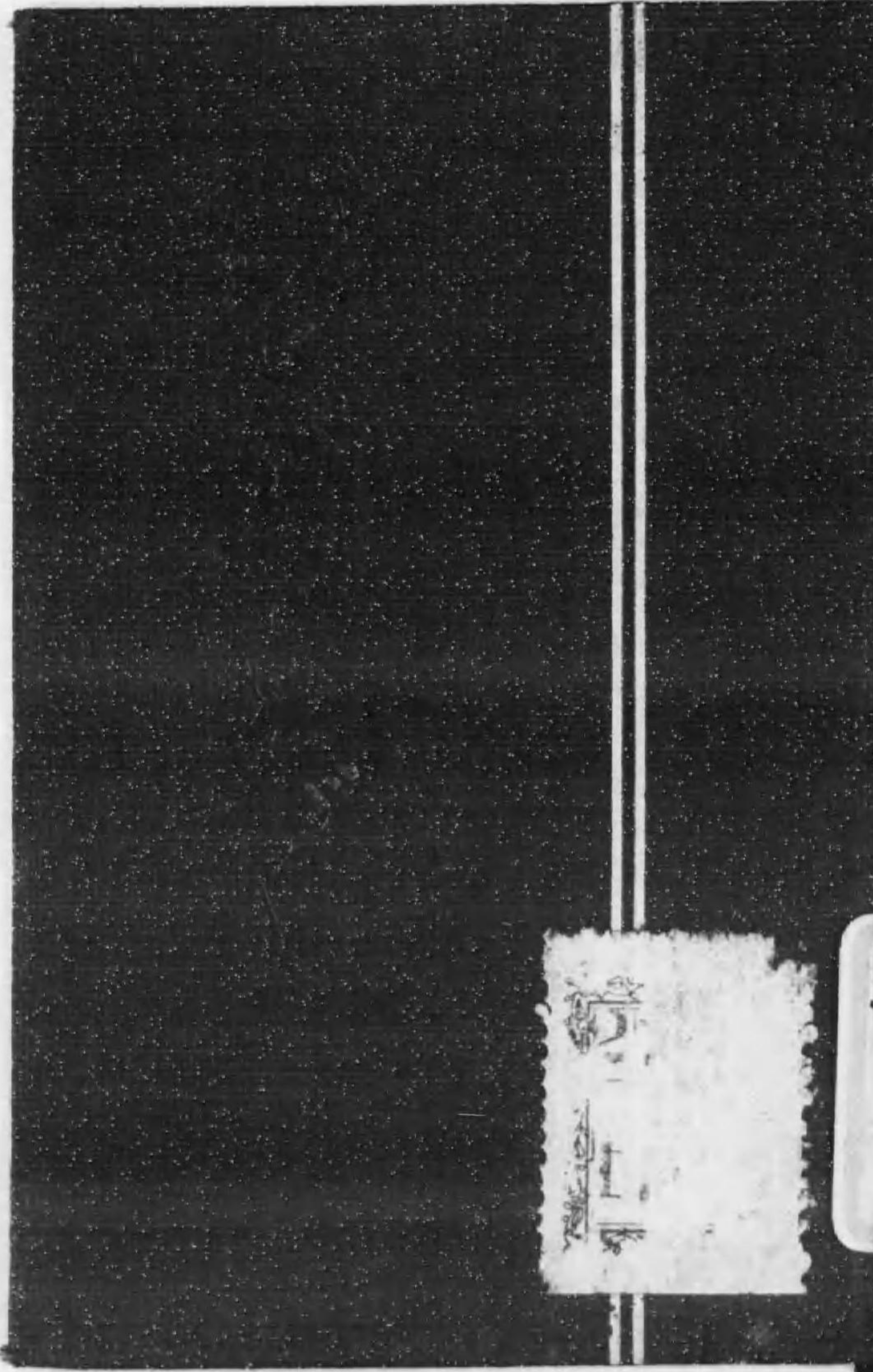


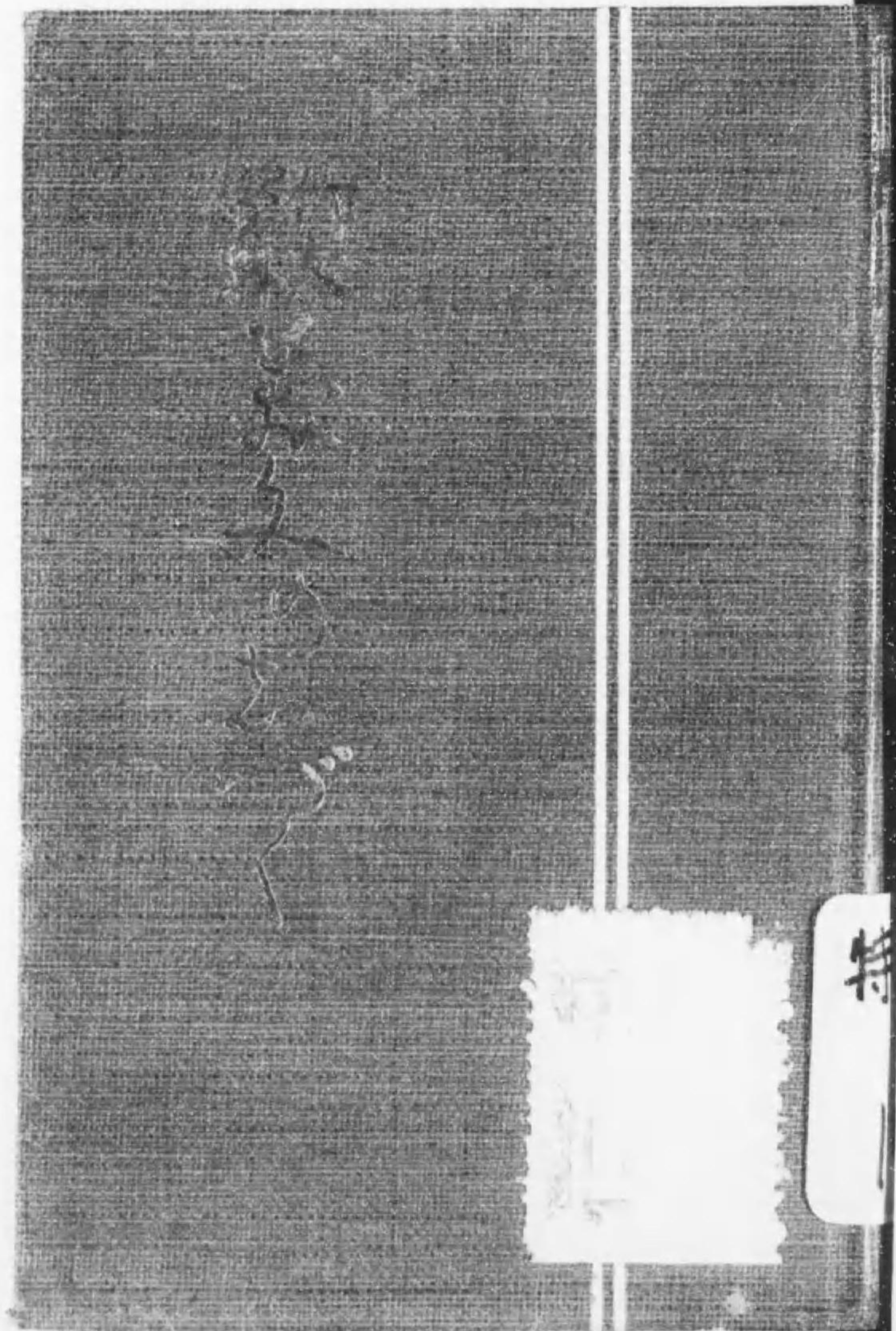
始



9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

非



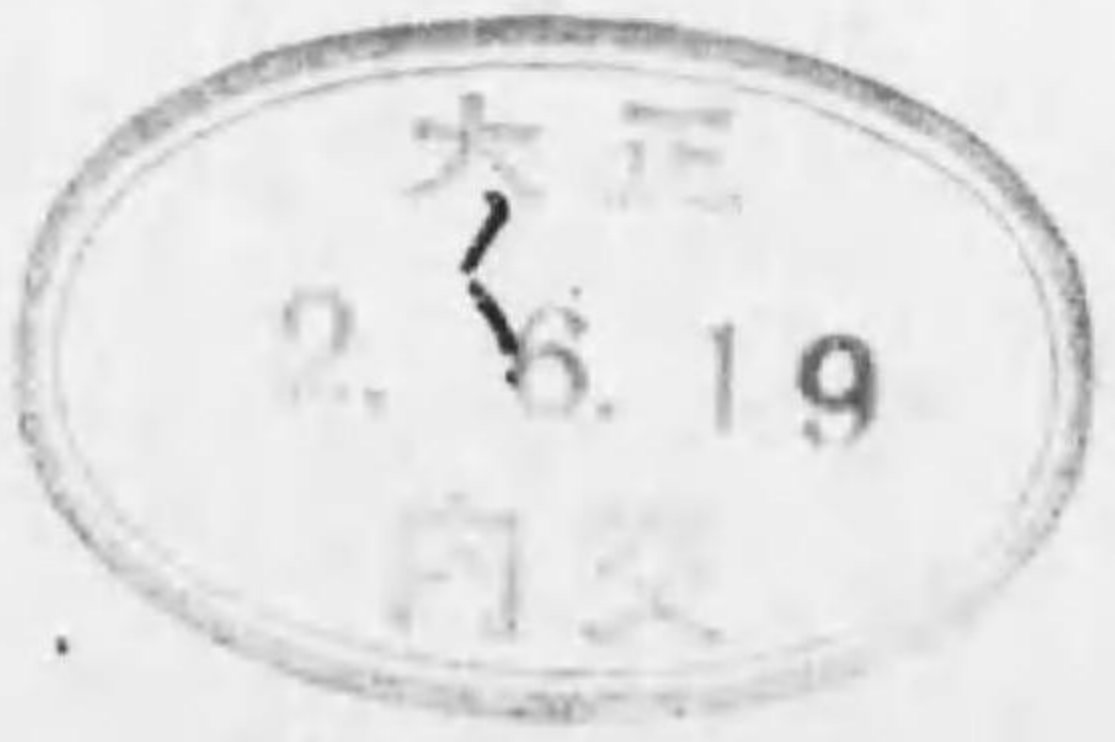


標



資作
料文
美
文
の

し
づ



大正
2. 6. 19
内交

資
文
林

美

文

の

し

ん



蒼海に珠片を探り。山嶽に寸
玉を搜り集めて而して篇を爲
せるもの。即ち本書なり。編
纂親切。簡にして要を得たり。
大方の一顧に値ひせずとも。
初學の参考としては充分なら
ん文海に棹すの士。座右の友

とし賜へかしと。著者に代り
て野次るものは。

大正二年の春 凝香園主人

作文美文のしづく目次
資料

(四季)

▲一月

目次	(1)
○新年	一
○若菜	二
○福壽草	三
▲二月	
○紀元節	三
○霞	四
○春雨	五

○春風	六
○柳	六
○椿	七
○梅花	八
○鶯	九
○白魚	一〇
○蛤	一〇
○鱒	一一
▲三月	
○朧月	一一

(3) 次 目

○若葉	○薔薇	○筒	○燕子花	○芍藥	○牡丹	○初鯉	○端午	○暮春	○競漕會	○春香
.....
三三	三二	三一	三一	三〇	三〇	二九	二八	二八	二七	二六

▲五月

○蓮	○紫陽花	○百合	○田植	○五月雨	○蝸牛	○蜘蛛	○蚊	○杜鵑	○盧橘	○卯の花
.....
四〇	三九	三九	三八	三七	三六	三六	三五	三四	三四	三三

▲六月

次 目 (2)

○蜂	○蝶	○雀	○歸雁	○雲雀	○燕子	○雛子	○墓筆	○土筆	○菜花	○蕨	○桃花
.....
一八	一八	一七	一七	一六	一五	一五	一四	一四	一三	一三	一二

▲四月

○蠶	○櫻鯛	○麥	○梨花	○海棠	○櫻花	○山吹	○藤	○躑躅	○春色	○蛙
.....
二六	二五	二五	二四	二四	二二	二二	二一	二一	一九	一九

(5) 次 目

○朝顏	五八
○女郎花	五九
○萩	六〇
○葡萄	六一
○虫	六一
○鷹	六二
○天長節	六三
○秋月	六三
○秋色	六五
○菊	六八
○蕪	六九

▲九月

○雁	七〇
○秋禽	七一
○鹿	七二
○鮭	七三
○秋魚	七四
○稻	七五
○紅葉	七六
○秋果	七七
○鮓	七八
○沙魚	七九
○鴨	八〇

▲十月

次 目 (4)

○瓜	四一
○茄子	四二
○枇杷	四三
○水雞	四三
○螢	四四
○夏景	四四
○避暑	四六
○夕立	四七
○蟬	四八
○撫子	四九

▲七月

○夕顏	五一
○林檎	五〇
○金魚	五一
○海水浴	五一
○歸省	五二
○孟蘭盆會	五四
○桐一葉	五五
○露	五五
○霧	五六
○雷電	五七
○枯梗	五八

▲八月

(7) 次 目

○島	○波	○海	○海	○川	○山	○雨	○風	○虹	○夜	○夕
.....	濱
二二	二九	二五	二一	一〇八	一〇四	一〇三	一〇二	一〇二	一〇一	一〇〇

▲地 文

○社	○家	○城	○村	○橋	○原	○森	○井	○瀑	○巖	○谷	○湖
寺	屋	落	野	林	泉	布	谷
一三一	一三〇	二九	二九	二八	二七	二六	二六	二五	二四	二三	二三

次 目 (6)

○冬	○冰	○鯨	○千	○寒	○落	○木	○時	○暮	○霜
景	鳥	月	葉	枯	雨	秋
八七	八七	八六	八五	八五	八四	八三	八二	八一	八〇

▲十二月

▲十一月

○曉	○雲	○星	○月	○日	○天	○歲	○寒	○雪
.....	幕	威
九九	九七	九六	九五	九四	九三	九二	九〇	八八

(天 地)

▲天 象

(9) 次 目

○洗 ○浮 ○篤 ○懦 ○忍

着……一六
薄……一七
實……一八
弱……一九
耐……二〇

▲性格

○飢 ○火 ○地 ○洪

饑……二一
災……二二
震……二三
水……二四

▲天變地異

○熱 ○暗 ○聰 ○傲 ○遜 ○貪 ○廉 ○優 ○果 ○殘 ○溫 ○輕

心……二五
愚……二六
明……二七
慢……二八
讓……二九
慾……三〇
潔……三一
柔……三二
斷……三三
忍……三四
厚……三五
躁……三六

次 目 (8)

○兄 ○夫 ○親 ○君 ○憤 ○吊 ○慶 ○旅 ○哀 ○容 ○戀

弟……三七
婦……三八
子……三九
臣……四〇
怒……四一
悔……四二
賀……四三
行……四四
別……四五
貌……四六
愛……四七

▲人事

○海 ○海 ○陸 ○訓 ○舉 ○性 ○軍 ○美 ○朋

嘯……四八
戰……四九
戰……五〇
戒……五一
動……五二
質……五三
人……五四
人……五五
友……五六

(時 變)

▲戰 鬪

(11) 次 目

目次終

○竹……………二〇三
 ○松……………二〇三
 ○鼠……………二〇一
 ○猫……………二〇一
 ○犬……………二〇〇
 ○猿……………二〇〇
 ○狐……………一九九

次 目 (10)

○信 巖……………一九二
 ○卑 屈……………一九二
 ○勇 剛……………一九〇
 ○懶 惰……………一九九
 ○勤 勉……………一九八
 ○詔 諛……………一九八
 ○硬 骨……………一九七
 ○悲 憤……………一九六
 ○慷 慨……………一九六
 ○偏 辯……………一九五
 ○公 平……………一九四
 ○冷 淡……………一九四

○牛……………一九八
 ○馬……………一九八
 ○熊……………一九七
 ○象……………一九七
 ○虎……………一九六
 ○鷄……………一九五
 ○鳥……………一九五
 ○鶴……………一九四

▲動 植

○執 拗……………一九三
 ○和 順……………一九三
 ○猜 疑……………一九二

(1) くづしの美文

作文資料
美文のしづく

（四季）

▲一月

○新年

○新年しんねんの曙光しよこつは南臺灣みなんたいわんの果はてより北滿洲きたまんしうの空そらに及およぶ、見みよ、千秋せんしう
の鶴つるは松樹せうじゆの上に舞まひ、萬歳ばんざいの龜かめは青海せいかいの波なみに浮うかぶ○屠蘇とその紅くれなるを頼ほう

梨花生著

に染めたるは東家の美少年也、骨牌の墨を顔に残したるは西家の可憐嬢也。○南山の壽風徐ろに至つて、瑞雲天地に霞翳たり。○曆こゝに改つて千門萬戸には旭旗翻り、街衢閭巷、都鄙村落、到るところに慶賀の聲あり。○明けゆく空の景色さらに昨日に變らざれども見よや大路に松立て亘して花やかに注連を飾れる。○少女は相集りて羽子を遊び、童兒は相伴ふて紙鳶を飛ばす。

○若菜

○衣手いまだ寒けれど、恰好、春の野に若菜を摘まむ哉。○水田の傍點々なる翠色、これ青芹の芳を吐くところ。○細流潺湲たると

ころ、童幼こゝに集りて翠芹を摘む。○二葉より優しき若菜。○暮霞徑路を閉すところ、誰が家の見ぞ、若菜を摘む。

○福壽草

○新年の慶賀を翠色の莖に籠め、陽春の佳瑞を黄金の花に示す。○その莖の緑は福祿の瑞、その花の黄は壽榮の光。○一莖の花、一輪の瓣、凡て是れ吉兆ならざるなし。

▲二月

○紀元節

○建國紀元の祝日○金甌無缺の國風、萬世不朽の鴻業、創胤
せられてより春秋まさに三千年○神州の基まさに定まりたる紀元
の佳辰也、吾人神州の民、豈欣仰せずして可ならむや○この紀元
の佳節定つてより、皇統連綿、聖德無疆、吁吾人櫻花國
民の幸福、以て萬國に誇るべき也。

○霞

○薄紅の刷子もて一撫したるか如き空○殘霞一抹○唯見る雲か
否也、烟か、否也、これ彩霞の春郊を閉せる也○雲錦一帶、山麓
さらに見ゆす、見よ、峰頭には旭日瞳々として上る○霞の縹

鳥の聲○汀に立てば沖には八重の霞○見よ、駘蕩の春霞、聞け
劉曉の春の曲○水村山廓、悉く烟霞の中に没す○山紫
翠て霞み、水翠を織て烟る。

○春雨

○輕風東より吹て柳條を動かし、春雨南より來りて殘雪を消す
○翠烟、朧たり雨中の柳、花紅葉、綠雨を含んで新なり○春帆
一棹、雨を穿つて來る○一簾の細雨、一爐の烟○淡烟籠むるところ
柴門暗く、春雨昔滑かにして点滴繁し○花を催すの雨は是れ
花を散らすの雨。

○春風

○輕舟に棹して嵐峽を過ぐれば、微風一陣花雲の如し○輕風柳條を吹て河面水紋を織る○春風一陣殘蘆を度り春水微動堅氷を解く、○春風爾々として梅唇先づ笑ひ、曉霞靄々として柳眼まさに眠る○春風輕く艇舷を吹き、細波俄かに舵身を濯ふ。

○柳

○柳は力なくして枝先づ動き、池水は浪に文ありて氷漸く解く○堤上の楊柳曉風に揺ぐところ、双燕翼を並べて飛ぶ○柳條

長く垂れて河水を酌む○花は雨の過るによりて紅まさに老いたり柳は風に欺かれて緑漸く垂れたり○春月柳の眉を洩る夕、鴛鴦あり晚風に飛ぶ。

○椿

○椿花まさに咲て満底紅璣に盈つ○遠くこれを望めば、綠葉の間に紅珠の聯れるもの、これ大輪の椿也○綠葉の茂れる間に白玉の椿開く、葉は花によりていよく緑に、花は葉によりていよく白し。

○梅 花

○霜葩、雪夢、枝まきに瘦せたるところに玉を綴りて、見よや春風
 第一香十里の村落、凡てこれ梅花○滿溪の香雪、これ別乾坤○風
 は春寒を送りて南より吹き、梅花雪の如く簾帷を打つ○老幹の
 湖邊に孤立するものは隠士の風あり、新樹の牆邊に窈窕なるもの
 は佳人の姿なり○歩して花下に至れば、風薫つて人を襲ひ、香清う
 して骨に沁す、加之も黃鸝啼々として嬌音を弄し、峽蝶翻々
 として香に狂ふ○扁舟一棹、溪流を溯れず、千株梅花風影さ
 らに清く、最も可、黃昏一痕の月○忽ち見る籬邊梅樹の影、氷

姿月を宿して白續粉○梅花の香は紙窓を洩れ、黃鸝の聲は山後に
 在り○水清く淺きところに吟鞍を駐むれば、疎影斜に竹外より調
 く○梅花三輪 月半痕。

○鶯

○梅花底院夢回るところ處、聽得たり新鶯第一聲○黃鳥宛轉、
 花を蹴りて高枝に轉り、花を啣みて低枝に語る○柳條には燕飛び、
 梅樹には黃鸝啼く○春風吹送る綺羅の塵、到るところ嬌鶯の巧
 みに喉を弄するあり。

○白魚

○遠洋の水底には巨魚あり、近海の水底には白魚棲む○隅田の堤、利根の流、こゝに白魚を網するものは張三李四の漁童也○灣外洲渚に富むところ、白魚こゝに群り來りて蒼波轉た白し。

○蛤

○朝來濱頭に逍遙せる佳人の一群、相競ふてその柔指に探るものは蛤也○細波激瀾なる金沙銀砂の間に、光輝ある飾紋は是れ蛤貝也○遙かに尾西の連山を臨む爰伊勢の海濱、十里の長江

七里の曲浦、到るところに蛤あり。

○鱗

○潮水深くして山の如き巨浪澎湃たるところ、鱗魚一群、鱗々相摩して縦横に游泳す○曳上し網の中には、見よ、三尺の鱗魚、激瀬として躍る、銀鱗藍身日光に映じて美觀馨ふるものなし

▲三月

○朦月

○微茫月色、花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの闇く、疎な

一枝は月にさし出で、ほの白く、風情言ひつくし難し、○十六日の月、櫻の梢にあり、空色淡くして碧霞み、白雲團々月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和らかなり○好雨新たに霽れて天外、聲なく、花間の明月影淡くして窓を窺ふ、暮雲は前山に迷ひ、朧月は後庭を照す。

○桃花

○江水緑を湛はして走るの堤雨に從ふて桃花綠亂たり○百樹千株、夢浪の中に點綴するの桃花、婀娜、數百武に亘り、その紛々として地に落つるものは文魚の游泳するが如く、大樹の横はる

ものは長橋の浪に架するに似たり○雨を帯びたる桃、露を宿せる海棠、雨を帯びていよく瀟洒なるは桃花の風趣、露を宿してますく、艶美なるは海棠の容姿○海路の東風草烟を帯び、一川紅は漲る桃花の影。

○蕨

○春郊到るところ、緑を以て蔽はる、これ蕨の秀でたる也○輕風吹き來る畦路に、蕨むり、童幼籠を負ふてこれを摘む。

○菜花

○春郊十里、菜花の村○麥隴萬頃晴烟を帯び、菜花畔裡に雉
兒眠る○紅花翠柳村影を埋め、綠麥黄菜郊外の布く、○一
徑斜に通す菜花の道、菜花盡くる所これ君が家。

○土筆

○一望菜花麥隴の間、に淡赭の陣を敷けるもの、これ土筆なり
○水田の傍、露を帯びたる土筆あり、村女兩三これを摘む○清
流の隈、叢立てる土筆、咄々天に向つて何事をか書く。

○堇

○花まさきに落ちんとするの紅堤、茲に紫堇の露に濕ふあり○東郊
三月、新たに晴れて、堇草茂るところ蝶影輕し○煙靄垂柳を罩
めて滿地の春風行き盡さず、茲に紫の堇草あり○妖態露は
肥ゆ紫堇草、清粧雨は綠す紫雲英。

○雉子

○雉子あり、練亂たる丘上に眠る○春草叢裡、雉兒あり、羽翼弱
うして未だ飛ぶ能はず○荊棘叢り亂れて雉子翺けるに難む。

○燕

○春 漸く 關にして 柳糸水に 烟り、東風 軽く 吹送つて 燕子來る
○江南三月 既に 清明、綠柳江邊 燕子飛ぶ ○一雙の 春燕 窓を穿
ちて 飛ぶ ○垂柳 扇々として 渡頭人なきの 夕、晚風に ふかれて 双燕
飛ぶ。

○雲 雀

○芳草 綠千里、雲 雀あり 空際に 語る ○春政 麥秀で、雲雀 漸くに
老たり ○麥浪 翠を 織るの 所、啾々 何を 訴ふ 告天子、忽ち 飛去
つて 雲際 があり ○綠波 漲る 麥隴の中、雲雀 雛を 飼ふて 啼く。

○歸 雁

○數行の 歸雁 北方に 飛び、春 月 西天に 朧なり ○遠汀 近渚 淡霞
の中、歸雁 一聲 花 漸くに 開く ○雲外 影は 見ぬ されども 歸雁の 聲
あり、西山 月落ちて 正に 春 曉 ○半夜 天際を 度るの 歸雁に 孤枕 夢は
破れぬ、窓を 推せば 上 弦の 月 朦朧として 庭樹に あり ○仰ぎ 見れ
れ 雲際を 度るの 歸雁 あり、花 朧にして 春の 夜まさに 明けんとす。

○雀

○東風 竹林に 入りて 群 雀 喧し ○春日 梅花 開いて 群 雀 竹

林りんに啾かいく々くたり○綠りよくするふかところ翠すいめ深あき所らうく、雀はなあり朗と々ちが聲あを放はなつて飛とび交あふ
○烟霞えんか淡泊たんぱく、晚風ばんふう輕かろく吹來ふききたるところ、群ぐん雀じやく争あふて埒ねぐらに飛とぶ

○蝶てふ

遅日ちじつ青山せいざん、狂蝶けふてふの纖翅せんしを弄らうするあり、春しゆん色しよく駘蕩たいとう、花はな都と城じやうに
滿みつ○痴蝶ちてふ花はなに狂くるふて春しゆん色しよく正ただに艶えりなり○春しゆん庭てい花はな風ふうに綻はらび、
映蝶けふてふ香裏かうりに舞まふ○菜花さいくわの浪なみに飽あて櫻花おうくわの幕まくに戯たふる、胡蝶こてふ一いち陣ちん。

○蜂はち

○千紫万紅せんしばんこう、これ芳はう、これ妍けん、蝶舞てふまひ蜂狂はちくるふ○岸花がんくわ飛とんで蜂はちを追おひ、

地葉ちえふ墮おちる魚うをを驚おどかす○翅つばさに金章きんしょうを凝こして蝶夢てふま長ながく、鬚ひげに紅英こうえいを
粧よそはふて蜂衙ほうがい忙まし。

○蛙かはづ

○春しゆん天てん月げつ夜や一いっ聲せいの蛙かはづ、撞破つさまる乾けん坤こん共ともに一家いっか○啼蛙ていあめ雨あめを呼よんで春しゆん
草さういよく緑みどり也なり○蛙鳴あめい水田すいでんに起おこり、細雨さいう堤柳ていりうに濺そぐ○一天てんあめ雨あめなら
んとして啼蛙ていあを聞きき、花散はなちらんとして歸雁きかんを見みる。

▲四月

○春しゆん色しよく

○雨は柳の眉を書き、霞は桃の唇を濕す○春風春水一時に到りて野草烟の如く、野花綠亂として争ひ發く○窈窕たるは桃李の花、青々たるは麥隴の苗○南窓の櫻花既に七分の笑を含み、三徑の草色早く三分の緑を帯ぶ○山は翠に花、綻びて露深く、水は皓く鳥、囀りて風、暖し○紫の塵かと思しは人の拳に似たる早蕨、緑色濃き薄と見しは錐にも似たる蘆の若芽○家あれば桃あり柳あり、野あれば菜あり麥あり、山あれば松あり柏あり、川あれば水あり橋あり、見よや桃は赤く又白くして、柳は翠、滴らんとす、菜花は黄に麥苗は青く、松は緑に柏は碧し、而して水は濛々として橋は紅霞の如し、實にこれ自然の彩畫

○躑

躑「杜鵑花(さつき)。映山紅(きりしま)」

○映山紅花まさきに盛、滿峽亂點、濃朱を著くるが如し○青苔に富み翠樹の茂る間に、見よ艶なる紅を流して映山紅花今や滿開○山は皆石身にして土これを載せ、松これが髪となす、而して杜鵑花その間を粧ふて腥血滴るが如し○奇岩怪石の間に躑躅あり、遠望紅を漲らして頗る艶。

○藤

○園中の池畔、老藤の支棚に架するあり、三尺の紫房、花方に盛

に、えんようみづ 麗容水に映じてすむちう 水中また花あるかと疑はるうたが ○水は翠に清かに、はな 花は紫に麗か也 ○東風動いて紫花斜に搖ぎ、りよくするふか 緑水深くしてりぎよたくみ およ 鯉魚巧に遊ぶ。

○山 吹

○江南三月の天、てん 棣棠花咲て蝶夢濃か也 ○東風吹送つて開ひら き盡す棣棠つくと 幾株の花 ○晚霞靄然として細流水碧なるところわう 金の波を寄するもの、これ棣棠花也。

○櫻 花

○落花風に誘はれて水花紋を織る ○全山目に觸るゝところ花なはな らざるはなく、濃艶綽約幾万株、かじん 住人の簇り立つが如く、せん 仙媛の争ひ舞ふが如し ○満山の櫻花、まな 雪を學んで飛び、とん 飛で意あるが如く我衣に點す ○雨霽れて花房の露、のぞ 滴るを望めば、あだか 恰も美人新にあたら 沐するの姿に似たり ○満山の櫻花は爛熳として艶を街ひ芳を競ひ近ちか きものは語るが如く、とほ 遠きものは招くが如く、こうはくあひふく 紅白相含み、そまつあひ 疎密相映じ、せんたいばんじやう 千態万状、め 目くるめき心酔ふ ○一掉花を穿つ十里、らく 落花流水 杳然としてゆく ○長堤十里花の隧道を穿ちて、しゆんじやう 春城ところ 處として花ならざるはなし ○落花雪の如く柴扉を叩く。

○海棠

○月殿の妃、雲宮の姫、雨を含みし海棠を挿す○海棠雨を帯びて
晩粧流るゝが如し○簾外霏々雨絲に似たり海棠數枝雨に綻
ぶ、恰もこれ西施浴を出でたるの姿。

○梨花

○雨過て桃花いよく紅に、闇深うして梨花ますく白し○窓前
流水は翠に、屋後梨花は白し○庭園の梨花漸くに開いて、瀟洒
却て烟容に勝る、その状、浴後佳人の新粧を擬して立てるに似たり

○麥

○春園風暖なるところ麥秀で、漸々たり○春漸く深からむ
として麥隴稍黄ばむ○翠然波を織りたる麥穗淡黄を帯ぶ、れこ杜
鵲正に啼かむとするの時。

○櫻鯛

○見よ、幾十隻の短舸、相率ゐて炬火を焼きつゝ波濤を凌ぎ來るを
これ漁夫が一攫千金の利を博すきべ鯛網也○千仞の海底、蒼碧
を湛ふるところ、紅鱗の深淵するあり、その翠とこの紅と相映じて

あだか 錦綾の亂るゝが如し○櫻花爛熳たるの候、これ斯魚が尤も
肥に尤も美なるの時也、世俗これを稱して櫻鯛と呼ぶ。

○蠶

○繭を出でたる蛾、産卵千百にして死す、蜂蟻の生命と孰れぞ○
蛾死して卵を留む、夏逝き冬過ぎて夏再び回り來るの時、その卵
化して蠶となる○桑の葉を食ふこと一夕にして十貫、一石の蠶肥に
て糸を吐く。

○春 霽

○暮鐘 霞に響いて朧月出で、劉曉たる笛聲櫻花の闇に聞ゆ○暮
靄櫻樹を掠めて、見よ、江上には漁火の明滅するを○長天遙
かに淡烟を籠め、古寺の鐘聲落日を催がす。

○競漕會

○紅、白、紫、紺、緑の帽子を冠りたる各校の選手は各々その校
旗の下に集りぬ○合圖の號砲轟然と響いて四艇は波を切りぬ八列
の權は忽ち鳥の如く水中に躍りぬ○青勝てと呼べば白負くるな
と叫び、さながら狂へるものゝ如し○舵手が「ヘビー」と怒り叫びし
一聲に、紫艇は見るゝ他を挺いて決勝點に入りぬ○青遂に緑を

挺たてくこと一いつ艇てい身しん半はん、第一だいいち着ちやくの名めい譽よを得えたり、

○暮ぼ 春しゆん

○花くわ 紅こう 綠りよく 葉えふ、春はるまきに盡つきんとす○九十くじゅうの春しゆん 光くわうこゝに盡つきて
千せん紫し萬まん 紅こう 悉しつく地ちに委あす○柴さい門もんを出いづれば落らく 紅こう 蘇そ 苔たいを蔽おほひ、新しん
緑りよく 稍しやく 茂まうりて鶯おう 聲せい 老らう 幼よう。

▲五月

○端たん 午ご

○臯さつ月つきの鯉こいは屋やう 上かみに跳おどつて若わか葉かの風かぜを孕はらむ○軒のきには武たけ内の宿うち 禰ねと

盡えがきたる職の立たてるを見みる○時ときや端たん午ごの佳かせ節せつ、床とこには祖そ先せんが幾いく 職せん 場じやう
を經へたる功こう名めい手て柄へに緘いの糸いとも切きれ色いろも褪さめたる紫むら 裾すそ 濃のの 鏡やう 飾かざ
り、これに明めい 珍ちん 鍛きたひの 兜かぶとを添そへ、棚たなには即すなはち祖ちち父いが藩と主のより拜はい
領りやうの九く寸すん五ぶ分ぶん、眞しん 紅くの色いろは燃もゆるばかりの蜀しやく 紅こう 錦きんの 袋ふくろに納おさめ
たるまゝ掛たて立かけて。

○初はつ 鯉こい

○水みづ 碧あをくして底そこ 深ふかき 處ところ、青せい 鱗りん 藍らん 身しん、波は 光くわうに映えいじて夜や 色しよく 轉た 妻せ
涼りやう 也なり○君きみ 見みすや、初はつ 鯉こいの 一いつ 聲こゑに纏まとへる布ぬの子こを脱ぬいで魚うをに換かへ、濁たく
酒しゆ 三さん 合ごう、陶とう 然ぜんとして舌した 鼓つづを打うつもの、これ江え 戸どの阿あ 哥にいなるを。

○牡丹

○田圃寧んで富貴の花なからむや、一稜の金粉桑麻に映ず、○一莖の牡丹花既に開き、三莖の青葉露を結びて翠也○花の窈窕として加之も弱からず、濃艶にして加之も瀟洒なるもの、これ牡丹花也

○芍薬

○愛すべきは艶麗人を酔はしむるの嬌姿、慕ふべきは嬋娟人を恍たらしむるの婉容○園裡の芍薬、紅なるあり、白なるあり、戯れにその白なるを源氏、紅なるを平家と呼びしが、一夜風雨襲

ひ來りて、無情、紅落ち白散しぬ。

○燕子花

○水は廻る十二の橋、橋下杜若の紫にして艶なるあり○菖蒲花白きは白帽、綠衣にして立てるが如く、花紫なるは紫冠、翠裳にして笑めるに似たり○雨に濡れて紫燕花まきに開き、池水細漣を生じて紫瓣皆動く○清風吹き來つて杜若紫に開き、郭公一聲雨後の新月に啼く。

○筍

○土 柔かにして緑竹猗々たるところ、玉筍あり、地を挺くこと尺 ○花 謝して葉茂り夏これより深からむとする時、竹林の中より市場に上るもの、實にこの君也 ○雨霽れて竹林翠滴たるところ、物あり、地を動かして土を挺くこと三寸。

○ 薔 薇

○櫻花は本朝の名木、薔薇は異郷の名花、共に花樹の霸王たるもの ○羅綺にも堪ぬ佳人、纖手をあげて薔薇を折る、その手白玉の如く白く、その花紅玉よりも紅し ○一輪の紅薔薇を黒染の髪に挿したるは、誰が家の處女ぞ。

○ 若 葉

○松杉風外亂山青く、綠樹影沈んで魚木に上る ○嫩葉翠烟を籠めて樹陰涼し ○青苔日に厚うして自ら塵なきところ、綠樹陰を重ねて邊を掩ふ。

○ 卵 の 花

○卵の花下しふさ雨 ○卵の花の垣根まだ蕾なれど、闇のうちにも稍白う匂へる心地 ○卵の花垣に匂めば、いづくともなく血に泣く 杜鵑の聲 ○闇にも白きその花は綠色濃きその葉と色配りよく、賤が

袖垣そでがきさすがに風情ふぜいを添そふ。

○ 盧はな 橘たちばな

○ 盧はな 橘たちばなは咲さきぬ、緑みどりの葉は、黄金こがねの實み、露つゆにぬれて、まことや郭ほと公との臥所ふしど○そばふは五月雨さみだれが晴間はれま、杜鵑ほととぎすの聲こゑを洩もらし、夕ゆう、いづくともなく花はな 橘たちばなの香かは、昔むかしの人の袖そでなつかし。

○ 杜ほととぎす 鶇ぎす

○ 狂風きやうふう 夜雨やう 春を葬ほうり去さり、紫紅地しこうちに委あして郭公くわつこう啼なく○時鳥じてう 三聲さんせい 月一痕つきいん ○千山せんざん 花落はなちて春既はるに逝ゆき、風雨ふう 滿城まんじやう 蜀魄しよくはく啼なく○殘月ざんげつ

一聲せいてい 啼血いけつの痕あと、杜鵑とけい 雲裏うんり 所ところを知らず○蜀しよく 魂こん 千年せんねん 將また誰たれをか恨うらむ、聲こゑは血ちに啼ないて花枝くわしため爲なるに紅くはならむとす○灯とうは暗くらうして窓さう 外がい 月つき 黒くろき夕ゆう、思おもひは故園こゑんに馳はせ、夢ゆめなりがたき時とき、おもはず耳みみを掠かすむる一聲せいてい「不かへる如に歸しかず」と。

○ 蚊か

○ 身みは小せうにして脆もろけれご友ともを呼よび類るを集あつめて押寄おしよすれば、人間にんげん 忽たちち坐ざを起たつて驚おどろきつゝ、すわや蚊軍ぶんぐんの襲しゆう 聲せい 雷らいの如ごとしといふ○常つねに團うち扇はもて追おはるゝこと急きふなれごも、去さつてまた襲おそふことの迅はやきは稻妻いなづまの如ごとし○蚊帳かでうあれごも機きに投なげ隙けきを窺うかがうて忍しのび入り、終夜よもすがその臥床ふしどを

廻つて五尺の人間を轉帳苦惱せしむ。

○ 蜘蛛

○ 蜘蛛は蟲族界の獵夫也、見よ、渠が苦心經營の粘網を、蚊に來り、蠅に迷ひ、乃至蜻蛉も羽を牽かれて、こゝに無残の最期をとゞむ○巧に網を結んで潜まつて物を害せんとす、奸賊の所爲に似たり、されば古代には朝敵に土蜘蛛の名あり○蜘蛛の風情を添ふるは、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽なごかけ捨てたるにあり。

○ 鵲 牛

○ 殘花昨夜の雨に散つて、細雨苔滑かなるところ、黃黒の班紋ある殻を負ふて檣壁の間を匍匐するもの、これ蝸牛也○殻を出づるや、徐ろに双角を擡ぐ、加之その角以て他を突くの力なし○蝸牛は只水にあるべきものゝ、いかで草葉に遊ぶらん、家持たれども、ゆく先々に負ひあるくは、水雲の安きにも似す。

▲ 六月

○ 五月 雨

○ 淫雨二旬 天爲に闇く、池水 漸くに溢れて紫燕花狼籍たり○連

日じつの霖りん雨う杵きねを漂たはし、今こん夕せきの大たい雨う軒けんを破やぶる○淫いん霖りん旬じゆん日じつに亘わたりて庭てい石せき爲ために浮うかぶ○綠りよく陰いん闇くらくして雨あめいまだやまず○茅ぼう屋おく三じつ日せう蕭せう々くの雨あめ、芭ば蕉せう葉はは伸のぶ徑けい數すう尺しやく○雨あめ霽あめはれずして泥どろ深ふかく、苔こけ綠みどりにして行かう人じんなし○雨あめこゝに霽はれざること九ここの日か、點てん滴てき耳みみに響ひびいて夢ゆめ結むすび難がたし○連れん日じつの雨あめは茅ぼう檐えんを侵をかし、烟えん霧む朦もう朧ろうとして日に光つを見みず。

○田植

○早さ苗なへの露つゆを拂はらふて運はこぶものは、誰たが家いへの娘むすめ子こで○君きみ見みすや、菅すげの小こ笠がさに眞ま紅しんくの紐ひも、これ早さ乙おと女めの頭かしらに冠かむるものぞ○細さい雨う糸いとの如ごとく、野や歌か斷たん續ぞくして聞きゆるもの、これ村そん男だん村そん女ぢよが營えい々くとして苗なへを植うる也なり。

○百合

○庭てい園えんの一いっ隅こくに白しろく咲さ誇ほこりたる百ゆり合り、花はな露つゆを含ふみていよく麗れいに、雨あめを帯おびていよく麗れい○園えん中ちゆうの姫ひめ百ゆり合り花はなまさに咲さいて艶えん容よう媚めいぶるが如ごとく、妍げん姿しほ傲おごるが如ごとく○屋やく後ごの百ゆり合りは花はな雪ゆきの如ごとく、籬りぐわい外ゆりの百ゆり合りは花はな墨すみの如ごとく。

○紫陽花

○牡ぼ丹たん謝しゃして百ゆり合りまさに開ひらくころ、黄こう白はくの蕾つぼみを破やぶつて花はな紫むらに咲さくもの、これ艶えん姿しほ人ひとを恍くわう惚こつたらしむるの紫あち陽さる花なり也なり○花はな紫むらに咲さきて

榮華を極め、その正に風に散らんとするや、忽ちにして淡紅色となる○白より黄、黄より紫、紫より淡紅、これこの花の變化なり、さればまた俗に稱して七化の花といふ。

○蓮

○泥中の君子あり、その花清白、曉風に開く○池中の白蓮、卷葉蓋を傾く○湖上の荷葉、曉の露をとめて、花まさかに開かんとす○藕花、白なるなり、紅なるなり、參差交錯、高低大小、昨の雨に悉く瓊唇を開き、曉風今や細漣を動かして翠蓋露を湛ふ。

○瓜

○雪白の冬瓜、團々として畑中に横りぬ○胡瓜大に熟して昨日の翠色既に變じて黄色となり、葉洞み、蔓枯れて孤影落寞○青瓜漸くに熟して縦に白き數條の班紋歴々として見るべし○越瓜の淡緑、青瓜の青、その色皆俗也、而して胡瓜の翠色に到つては實にこれ造化の巧を弄したるもの、畫家彩筆能く及ぶ所にあらず○その葉葡萄に似、黄色の花は形狀桔梗に類し、加之も時に實を結ばず、翠の蔓は蜿蜒匍匐して十丈百丈に及ぶ、これ婦女子に嗜まる、南瓜そのもの也○胸に赤心を包みて濃緑の衣を纏ひ、團々

として蔓つると共に蹲居そんきよするもの、これ水瓜すゐくわ也。既に熟すでじゆくして市いちに引ひか
れ人の手ひとてに渡わたるや忽たちまち庖刀はうてうの厄やくあに遭あふ、時ときにたまく好こう奇き心しんある兒ち
童どうに愛あいせられて肉にくを剝えぐ、燈籠とうろう水瓜すゐくわと命名めいして夜々やや賞美しょうびやある。

○ 茄 子

○その莖くきも紫むらさき也、その葉はも紫むらさき也。花はなもとより紫むらさきに咲さき、實みまた
紫むらさきに結むすぶ、これ茄子なす也。○田樂でんがくとし、鳴焼なげやきとす、これその風味ふうみの俗ぞく
に挺ねげるを萬人ばんにんに誇ほこるところ。○紫むらさきの鈴すずに似にたるはその實み、秋漸あきやう
に近ちかくして色いろ濃たん紅こうを帯おぶ。○初秋しよしゆの茄子なすは風味ふうみ尤も美び、故ゆゑに「秋茄
子すは縁よめに食くはずな」の諺ことわざあり。

○ 枇 杷

○その葉は緑濃きりこくして纖維せんゐ深ふかく、その實み黄璉かうれんの如ごとくにして頂いたに蒂へたあ
り。○籬まがきを去さること半間はんげん、枇杷ひはあり、青葉せいゑ繁茂はんもせる間に累あひ々だるとして黄
玉ぎよくを聯つらぬ。

○ 水 鶏

○白蘋はくひん生おふるところ、蘆荻ろてき茂しげるところ、夜深よるふかうして水鶏くひな啼なく。○柴門さいもん
人ひとなくして雨霏あめひ々ふたり、水鶏くひな夜啼よるなで門かどを叩たたく。○燈ともし暗くうして四顧こせき寂せき
然ぜん、忽たちまち聞きく門扉もんびに聲こゑあるを、枕まくらを歎なげつれば是れ水鶏くひなの戯たはむる也。

○ 螢 ほたる

○ 螢火一點明又滅 ○ 露は橋頭の月に光り、風は水上の螢を追ふ
○ 露滴つて弦月影は亂れ、風吹いて池頭螢火飛ぶ、○ 見よ一基
の火柱となり、高く堤上に飛ぶや、清風一陣忽ち散じ盡して青
光 低く波を焼く。

▲ 七月

○ 夏 か 景 けい

○ 午熱漸く散じて、蝙蝠柳陰より出づ、晚涼これより掬すべ
し ○ 四面緑昏くして梅始めて青く、幽禽院を占めて涼風に囀る
○ 樹陰地に満ちて日方に亭午、夢覚めて流鶯時に一聲 ○ 納涼橋
上月半輪、満紅處として遊船ならざるなし ○ 鶯吟は鶉聲とな
り、淡霞は梅雨となり、かの紅白爛熳たる今緑鬱碧翠となる
○ 螢飛びかふ夕、水鶏の叩く夜ころ ○ 春芳謝し去りて夏緑こゝに
起る ○ 蝸聲緑林に聳しく、庭前の石榴口を開いて夕陽を嚙ま
んとす ○ 木深き中に石燈籠の火影きら／＼と青葉の露を照す ○ 片
山里に春かれて暑さに堪へぬ頃となりぬ。

○ 溽暑

○ 蟬は樹梢にありて啼き、狗は檐下に臥して喘ぎ、溽暑人に迫る。○ 連日一滴の雨なし、天焼け地焦け、金燦け石流る。○ 炎威赫々、酷吏の獄を斷するが如く。暴虐人を苦惱せしむ。○ 街頭の砂礫は毒氣を蒸騰し屋上の鬼瓦は火焰を吐く。○ 炎暑路上の石を焼、て流汗脊に沿く、口渴し肺渴く、豈た々に吳牛の月に喘ぐのみならんや

○ 避暑

○ 關に凭りて清風に臨めば神爽かに氣蘇し、以て三伏の熱を消す

○ 夕立

るに足る。○ 緑陰深き所に細泉の涓々たるあり、一掬忽ち甘冽神身爲に快し。○ 涼影滿地、清風颯として到り、神澄み氣旺し。また塵紛炎威の何物なるを知らざらしむ。○ 金を流し石を燦すの天といへども、晚來一浴し了りて橋畔を逍遙すれば、山影水光滿身を襲ひ來りて、また炎熱の何物たるを覺へざる也。

○ 黒雲慘憺、沛雨盆を覆へして來る。○ 疾風幕然樹葉を捲て到り、猛雨沛然車軸を流す。○ 雲氣四方に起り大雨俄に到る。○ 輕風一過、驟雨來り、炎威忽ちに減じて萬物蘇す。蓬々たる風、斬々

たる雨、俄に來る、須臾、雨やみ雲散して長電海に飲み涼蟾天に在り○忽ち空一段闇み、一里ばかり彼方を駛り居たる舟の狼狽へて帆を引下ろすよと見れば、其あたり、海の面鱗々と蹴立ちぬ、大海を渡り來る驟雨の速さ、それ舟を戻せといふ間もあらせず、彼眞黒きもの見るく押寄せ來りて、冷風颯々と面を掃へば、舟の四周は忽ち億萬の水簇一時に跳るが如く騒立ち、忽ちにして簀板に送る白雨、一點、二點——千萬點、須臾に我等が一葉の小舟は黒風白雨の重圍に陥ちぬ。

○ 蟬

○ 翼に風を含むといへども聲は苦熱を導き來る ○ 群蟬樹梢に亂噪して微風一味の涼を送らす ○ 蟬噪頻りに林樹を動かし、午睡夢結び離し。

○ 撫子

○ 曉風露深きところ、撫子の籬に咲けるあり、花は瘦せたれども妍姿佳人の惱ゆるが如く、紅の色、優しき形、人をして可憐の情に堪へざらしむ ○ 撫子、花は咲きぬ、吁、この花、櫻花の艶、牡丹の麗に及ばされど、幽婉の風致、能く行人をして徘徊去るに忍びざらしむ。

○夕顔

○春香一刻直千金といへども、新月眉の如き夕、夕顔の花
白う輝く夏の香も、また千金の價ならしむ○一夜、床几を園内に移
して一家團樂の興、深し、時に入あり、夕顔棚の彼方より來る。

○林檎

○食後の果實、その數多しといへども、風趣横溢するもの林檎を
最とす○雪白き北海の林檎は、その色鮮江、風味亦頗る美也○
見よ、卓上の林檎、黒色の斑點を鮮紅の皮上に帯びて、香氣堂

に満つ、正に是れ南洋船齋のものならむ。

○金魚

○白玲瓏なる玻璃器のうち、碧玲瓏水を水に湛ふるところ、紅
花線亂するが如きは、これ長崎産の金魚が、三叉の尾を動か
して浮沈游泳せる也○園裡の築山に沿へる小池、こゝに清水を貯へ、
緑藻を浮べ、奇石を横へ、水は奇石の苔を洗ひ、風は緑藻に波
を寄するところ、紅鱗金鱸、水底より浮び來りて唼啜す。

○海水浴

○紅塵の都門を出て、青松いよく青く、白砂いよく白き所を
 麥藁の海水帽を冠り赤條々となりて歩む○曉起海濱に出で、
 日いまだ昇らざるの晴嵐を吸ひ青松白砂の間に足跡を印して追
 遙しつゝ、やがて海中に入れば、細波足を洗ふて身忽ちに輕し○一
 波來り一波去る所、身を海水に任して敢て動かす○その始、恐ろし
 かりし小波も今は馴れつ、風ふき捲る大波に遊んで蟹を拾ふ○全身
 潮に焦げて、業平卿の面影なし○佳人、白衣を纏ふて波に遊べば、
 碧水寄せ來りて黒染の髪を洗ふ。

○歸省

○輕薄風をなす都門の地を去り、山紫水明の故園に、淳朴愛すべ
 き故人と遇ふ、我が心の喜悅それ幾許ぞや○父も母も、思ひの外
 に老いたまはず、鏗鏘として微笑の態ありしは、予か歸省に於ける
 唯一の喜悅なりし○門内の夕顔、白う咲て清粧予を迎ふ、これ都
 門にありて得べからざるの興也○三年振の歸省、弟妹予を圍んで
 都門の狀を問ふ、慈愛の父母は欣然として予が談話に耳を傾けたま
 ふ○予が歸省の報は、甲より乙に傳はり、かくて丙、丁、戊、己、
 所謂る小學校時代の知己、腕白仲間の誰彼、皆大人めかして挨拶
 せり○路、故郷に近くに從ひ、先づ予が耳に入るは忘るべからざる
 郷音なり、あゝ、故郷の言語、その粹なる點に於て遠く東京語に

及ばざるも、予が胸裏には一種いふべからざるの快感を興ふ。

▲八月

○孟蘭盆會

○中元將に近づかんとす、去年阿母を失ふたる兒は、茄子を切りて馬となし、瓜を摘みて牛となし、誦ふて以てこれを齋く、何の爲にするぞと問へば、曰く「かあちやん」を迎ふるなりと○川邊には其處此處に火燃ゆ、其一つに行きて見れば、八十餘の老爺、線香を取り、つくづくと燃ゆる火を眺め居たり、吁これ去年遼東の野に戦

歿せし其最愛の一子を吊ふにはあらざるか○二年前に母を喪ひ父を失へる五歳の童も小さき掌を合して火を拜みぬ。

○桐一葉

○秋風高く吹て桐葉動き、一葉落ちて天下の秋を知る○窓外梧桐風なきに動き、庭前叢裡蟲初めて啼く○梧葉金風に颯り、颯々驟雨の濺に似たり○一葉梧桐颯零の夕。

○露

○金風颯々として枝爲に動き、曉露滴々として樹爲に雫あり○

午^{こはる}芳^{はな}の葉^はの裏^{うら}返^{がへ}しになりて累^{かさ}り合^あへる上^{うへ}に、星^{ほし}隕^{おち}ちて珠^{たま}とやなりけむ、萬^{ばん}顆^{くわ}の露^{つゆ}は水^{すい}銀^{ぎん}の凝^これるやうに轉^{まろ}びぬ○唯^{ただ}、滿^{まん}地^ちに蔓^{つる}草^{くさ}の苳^{さう}々^{さう}たるあり、蒼^{そう}苔^{たい}その邊^{あたり}を這^はふて白^{はく}露^{ろう}滋^しし○窓^{さう}前^{ぜん}虫^{むし}啼^なくの夕^{ゆふ}、叢^{そう}上^{じやう}露^{つゆ}玉^{たま}を欺^{あざむ}く。

○霧^{きり}

○金^{きん}風^{ふう}柳^{りゅう}條^{じょう}を吹^ふき、曉^{ぎやう}霧^む清^{せい}流^{りゅう}に滿^みつ○忽^{こつ}然^{ぜん}として、人^{じん}影^{えい}、物^{ぶつ}影^{えい}共^{ども}に現^{あら}はれ、水^{みづ}を切^きりゆく憂^{かつ}々の聲^{こゑ}手^てにとる如^{ごと}く聞^きゆ、これ霧^{きり}に包^つまれし江^{こじやう}上^{じやう}の舟^{ふね}也^{なり}○曉^{ぎやう}霧^む、激^{げき}江^{かう}を罩^こめて、見^みよ、影^{かげ}の如^{ごと}く、幻^{まぼろし}の如^{ごと}く水^{みづ}線^{せん}に、砂^{すな}麗^らはしき江^{かう}上^{じやう}は、宛^{さな}然^{がら}夢^{ゆめ}の世界^{せかい}に浮^{うか}び出^{いで}たる繪^え卷^{まき}

物の披^{ひら}きたるが如^{ごと}し。

○雷^{らい} 電^{でん}

○霹^へ靂^き一聲^{せい}山^{さん}壑^{がく}に轟^{とどろ}き、紫^し電^{でん}一閃^{せん}人^{じん}目^めを眩^{げん}す○閃^{せん}電^{でん}、霹^へ靂^き、高^{こう}樓^{ろう}を打^うち、爲^{ため}に震^{しん}死^しするもの十^{じゅう}數^{すう}人^{にん}○神^{かみ}の最^{さい}後^ごの審^{しん}判^{はん}の時^{とき}到^{いた}れりと思^{おも}はるゝまで恐^{おそ}ろしげなる雲^{くも}間^まより、闇^{やみ}をついて閃^{ひらめ}く稻^{いな}妻^{つま}の光^{ひかり}物^{もの}凄^{せき}し○紫^し電^{でん}閃^{ひらめ}きて雷^{らい}鳴^{めい}の音^{おと}耳^{みみ}を劈^{つんざ}き、火^{くわ}柱^{ちゅう}立^たちて黒^{こく}烟^{えん}漲^{なげ}る○凡^{おほ}そ天^{てん}壇^{だん}當^{かう}高^{かう}の美^みは電^{でん}にあり、電^{でん}一^{ひと}たひ黒^{こく}暗^{あん}々^くたる雲^{うん}間^{かん}に眩^{まよ}きばかりの光^{ひかり}を放^{はな}ちて、雷^{らい}鳴^{めい}轟^{こう}々^く、天^{てん}地^ち爲^{ため}に撼^{うご}く○黒^{こく}雲^{うん}黝^{えう}々^くとして咫^{しせき}尺^{べん}辨^{べん}ぜず、疾^{しつ}風^{ふう}樹^{じゆ}葉^{えふ}を捲^まき來^{きた}りて破^は窓^{そう}を打^うち、雷^{らい}雨^う將^{まさ}に大^{おほ}

に到らんとす。

○桔梗

○秋郊錦繡を織るところ、ついでうむらさき 紫に咲くは、露に濡れたる桔梗也○桔梗はその色に目をとられたり、野草の中におもひがけず咲出でたるは、田家の草の戸によき娘見たる心地ぞする。

○朝顔

○朝露庭に落ちて、舜花苔開く○竹籬に牽牛花あり、その色白なるは小に、紫なるは稍大に、赤なるは極めて大也、而して淡紅

と薄紫とは大輪に開いて、徑二寸○朝顔の盛すくなきはよき女きんなの常の病がちに打なやみ、土用八寸のかはるく隙なきに打臥し、一月の日数も二十日は頭から引込みたるが、たましく空晴きり朝日さし出たるに、心地よげに打粧ひ、衣裳などあらためてほのめき出たるには似たり。

○女郎花

○花や艶容人に迫るなく、麗飾目を奪はずといへども、しかも風趣横溢して秋郊爲に幽致を添ふ○郊外秋深うして女郎花をんななへしひらは、その花は黄に、その容は妍也、風ふけばその葉袖の如くに靡り

雨ふればその花 袂の如くに振ふ ○初秋の風によるめきたちて、菊に全盛を譲れるは優しき花といふべし。

○ 萩

○北海道には野生の萩多し、雨龍原頭、一望十里、雲に接するところ、満目萩に入りて紫色を流す、これ萩花の露に開ける也 ○萩は優しき花なり、さして手にとりて愛すべき姿は少なけれど、萩といへる名目にて人の心を動かす、假令ば地下の女のよく歌よむと聞つたへたるなつかしさには似たり。

○ 葡萄 萄

○紫玉玲瓏として朝露輝く ○葡萄、實熟して月下紫 滴るが如し ○窓外の葡萄、紫穂を垂れて風に搖蕩す ○葡萄の美酒夜光の杯。

○ 虫

○秋草庭は枯れて人絶むしところ、松蟲 劉曉なる琴を弾す ○曉霧深うして金鈴を聞く、疑ふらくは社殿の何方にあるや、霧霽れ日出で、萬目一新、これはこれ叢間鈴虫の聲 ○雨霽れて露涼しき夕、蜻蛉一團、その色赤紅、飛で南洋に向ふ ○青蘆一尺、川沿の家

皆午睡す、蜻蛉あり、低く水を掠めて飛ぶ○落葉窓を打て眠成り
がたし、半夜寒蛩庭を繞りて鳴く○氣冷かに聲は冴ゆ四壁の虫、
蕭條秋は到る萬家の中○秋風颯々鬢を吹き、荒庭草萎みて
虫語瘦せたり○池汀秋草の裡哀婉として蟲の啼くあり、櫻外何
の所ぞ劉 曉なる笛聲を聞く○野花秋は緑れて露 徑に滋く、人は
殘蛩聲裡より出づ。

○鷹

○遠く蒼鷹の羽搏荒く翔るあり、禽鳥聲を秘めて叢間に潜む○
單 鷹 翼を鼓せば群 雀 争ふて散飛す○その勢や疾風の如く、

その威や迅雷の如く、その爪や利刃の如し、而して羽翼一たび動い
て空中に翔 翔すれば、群禽その色を失ふ。

○天長節

○この金甌無缺の櫻花國に生れ、上に九文九武の聖主を戴くもの
豈鼓 腹 擊 壤してこの佳辰を祝せざるものあらんや○竹の御園生、
九重雲 深きところには、緑の龜の萬歳を壽ぐあり○今日はこれ天
長の佳節。

○秋月

○歩を水邊の長堤に移せば、乍ちにして樹葉月を遮り、路暗くして影冷かなり○一碧晴空月朧玲○十五夜の雨に隠れし月は今宵照り出でぬ、庭の真砂いつしか霜置けるやうに白み、樹陰黒く地に湧きぬ○秋氣肌に泌みて良夜いまだ眠り難し、仰ぎて天際を見れば、一輪皎潔として千里嬋娟、蒼旻織翳なし○金龍山畔月江浮ぶ、江は搖き月は湧きて金龍流る○玉兔團々波を蹴つて昇り、金波躍り銀浪碎け、冷風徐るに吹て清爽極りなし○三日月細く夢殿の上にかゝりて、秋の夜はやう／＼に明けそめたり○白鶴一聲月華來りぬ○三日月細し利録の形。

▲九月

○秋色

○日入りぬ、無花果の葉陰薄闇くなりて芙蓉の花も夕と共に凋まん
とす、空には雁聲あり○半夜知らず何處の寺ぞ、鐘聲撞起す故園の情○妖雲弦月を蔽ひ、虫聲切々として秋懷更らに深し○右顧すれば秋草、左盼すれば黄禾○秋高くして馬肥ぬ、天朗かに氣澄む○白露天に横はり、清風袖に茂し○百丈の清流は脚下に白布を曝し、萬頃の豊田は眼前に黄金を敷く○金風微動して梧桐凋

落し、秋雨霏々として芭蕉を打つ○草は荒庭に萎みて蟲語瘦せ、月
 明かに、遠渚雁聲高し、江村一夜秋將に老いんとす、細雨風は
 斜なり古板橋○日暮れて水白く兩岸黒し、鈴蟲、松蟲、きり
 ぐす、水を扱みて鳴き、山の暗きには梟咽喉を鳴らす、空に五
 位鷲の聲あり○槿花既に綻びそめぬ、悲しいかな秋の情、空には
 雁鳴き、木の葉飛び、地には蘆花白く、荷葉破れ、梧桐一葉ひらく
 と窓に舞ふ○彼岸花、螢、草、野菊、蓼、小さき粟の如き、稻の如き
 黎の如き、鳥、麥の如き、八千草に鳴く蟲の音を踏分けゆけば、蛙
 飛び、蝨斯飛び、脚には蟹がさくくと隠れゆく○女郎花咲き、柿
 の實ほのかに黄み、甘諸次第に甘し、法師蟬は晝に、松蟲、鈴蟲

は夜に、共に秋を語る○明くるや朝の萩の上露、暮るゝや夕の萩の
 下風、秋はそれより一廻り深くなりぬ○や、些し前までは東、山の
 薄、紅の襲をしぼつた夕日も既に消果て、明日の天氣を約束す
 る夕紅が名残に雲をいろどつて、古代更紗をむしつて居ました、いつ
 か早くさしのぼつた月は、まだ光を放つ力も無く、見立てれば中空
 で休息するやう、漸く十一日の形と、のはす、欠けたところは情無
 く折朽ちたやうに漠となつて居ました、木らしい木は見ぬ蓬生の
 庭、それながら昔の歌、合を忍べとか、蛸は四聲五聲鳴きに來て、
 蟋蟀も澁つた舌打をする様子、長く曲折なく引張つて鳴く鴉さ
 へ何やら洗みがちでした○空は曇りぬ、秋ながらうつとりと雲立ち

迷ひ、海は眞黒に響みたり、大氣は恐ろしく静まりて、一陣の風なく、一波だに動かす、見渡す限り海に帆影絶つて○齒の抜けた夢が寒蛩の聲に覺てから此來、急に風が肌にしみてまぬりましたと遠國者の年寄が、嘆つ秋となりぬ。

○菊

○玉水雪葩にして、貧處士の籬に秋を報するものは是れ菊花也○閑居誰かいふ良朋なしと、三徑菊白うして松また青し○雪より白く咲て、霜に傲れる菊花一輪、まさにこれ烈女の貌○露は道芝に玉を磨き、菊は藪陰に黄金を欺く○青叢馥郁として早く芽を

抽き、金水爛班として晩く花を看る○金英翠苔相映じて燈火に入り、燦爛として中庭を飾る○黄金の奇水、紫錦の艶葩、まさに是れ百花に殿たるの清趣、宛然秋の花神たり○菊花籬に瓊英を開き、一庭香は満て秋まさに深からむとす○敗荷既に雨を撃ぐの蓋なしといへども、殘菊尙霜に傲るの枝あり○新霜一夜瓦に軽く、芭蕉折れ、敗荷傾いて、吏籬唯寒に耐ふるの花あり○野菊西風に吹かれて、疎蔬こゝに離披たり、東籬、菊瘦せて秋徑に滿ち○節重阳を過ぎて秋漸くに老い、一枝の殘菊尙霜を凌いで芳芬を吐く○

○薄

○鈴虫鳴き、松虫唧くところ、薄、風に靡いて波を描く○薄、その穂は人の手に似たり、風これに渡れば、隠々として誰を招く○一望曠野、露こゝに深く、薄、我を招いて秋を語らむと欲するに似たり。

○雁

○燈暗して人に影なく、雁高うして月に聲あり○松影砂に印して烟水に着き、天風吹落して孤雁一聲○孤雁影あり暮雲歸る、秋風極目落日淋し○鴻雁雲に入りて残暉枯蘆を射る○秋の雁の江天におくれ、時鳥の曉の雲に叫ぶ、いづれにか定め侍ら

む、雁はあはれに時鳥はかなし○雁の音は、これを人の聲に喩ふれば戀を語らふ處女の聲にあらずして、これや淋しき寡婦の疇走りなる聲ならむ○雁の聲は聲にあらずして叫び也、所謂るザオイスにあらずしてこれ一種のシヤウ也○雨岸の蘆荻秋風に靡くの時三叉洲に下るこれ賓雁○過雁三更西風冷か也、書を帯びずして却て愁を帯び来る○秋風万里鴻雁啼く夜深く燈暗ふして旅客腸を斷つ○荻吹く風の音もそゞろ寒く、旅寢の雁の便なげなる聲の耳にとまりて。

○秋

禽

○深草に住むなる鴝は、その聲すみやかにして、世を憚からず、山にも近く水にも遠からず、粟の穂の静なる時は、こゝにも出で、遊ぶなるべし○百舌鳥餓ゑて燕雀を逐ふ、勢疾風の如し、小禽これを恐れて梢に潜む○霜漸く寒からんとして枯林百舌鳥の啼くあり○竹林緑深くして百舌鳥啼く○百舌鳥は起居につれなくて、諛はぬもの也、子など持ちたらば、いかにあらむ○秋風茂林を吹き、百舌鳥啼て秋色深し。

○鹿

○月光皎く満山の紅葉を照し、夜色沈々麋鹿遙かに啼く○宮島

の秋、夕ぐれの汐満ちんとす、大鳥居の下を遺漕するは、その目、乙女のそのの如く、露を浮べ、媚を呈せる可憐の鹿の子也○山嶺鹿は啼て白露の霜と化するを悲しみ、幽谷猿は叫びて孤客の夜衾を寒からしむ○一頭の牝鹿、卒然として芝生の彼方、常盤木の灌木の間より走り出づ、見渡せば春日社頭、柱楹丹朱を染め、満山の紅葉二月の花よりも紅也。

○蛙

○秋漸く深うして、天稍雨ふらんとし、怒濤三陸の濱を洗ふて浪に聲あるの時、蛙魚群をなして岸を襲ふ、これ漁夫が萬金を一

網もうするの時とき也なり ○鮭しやけは越路こしちに名なありて其國そのくにの雪ゆきにも似にず、色いろは入日いりひの雲くもを染そめて麗うるはしく照てりたるこそいみじけれ ○海うみ青あせく波なみ白しろきところ、鮮紅せんこうながら紅花こうくわを欺あざむくの身みを淡黒たんこく色の衣いに包つみつゝ、深ふかく海底かいていに游泳いうえいするもの、これ北海ほくかいの鮭しやけ也なり。

○秋しゆ 魚ぎよ (鱈たう。鱒まづ)

○鱈魚すじぎはこれ松江すんこうの名産めいさん 我朝わがてうにも品しなくだらず、張氏てうしは是これを秋風しうふうに思おもひて仕途しとを辭じし、平家へいけは是これを船中せんちゆうに得えて館路くわんろに進すすむ、進退しんたいいづれなか羨うらやむべき ○鱒いはしといふもの、味あじはことすゞを際こいしにするとか、多おほきが故ゆゑに賤いやしまる、たとへ該かは田島たはたの肥料こやしにな

るとも、頭かしらは門もんを守りて天下てんかの鬼きを防かぎぐ、其功そのこう鱈たうも及およぶべからず。

○稻いね

○万畝ばんほ稻いね熟じゆくして群雀ぐんじやくこゝに聚あつまるところ、案山子かざしあり、破笠はりつを冠かむり短簔たんさをつけ、端然たんぜんとして立たてり ○秋あき 閑あきにして稻肥いねこゆしかも五風ふう十雨じゆ時に従したがふ、吁あゝこれ豊年ほうねんの瑞光ずいてう也なり ○金齡きんれい風かぜに戦まぐの夕ゆふ、群雀ぐんじやくとうするあつまた 稻穂いねほに集あつまり来きりて更さらに案山子かざしに驚おどろかす ○黄稻かうとう十里じゆり ○見みよ、早稻わせは刈かられて、残のこるは豊ゆたかに充みりたる晚稻おくてなり也なり ○鳴子なるこの音おと、彼方かなたの山陰やまかげに起おこる、牽ひくは誰たれぞ、野守のもりか、否いな、稚兒ちじの戯たよれ也なり。

▲十月

○紅葉

○秋正に閑ならんとす、滿地の楓樹、青きあり、黄なるあり、淡江なるあり、眞紅なるあり○閑庭菊枯れて天漸くに寒く、霜飛で樹まささに紅也○暮鴉黒雲の如くに飛び、楓葉紅雨の如く飄る○呦々たる小鹿、母を慕ふところ、楓葉二月の花よりも紅也○風樹、その高きは寒松に雜りて明月を待ち、低きは水に蒞みて燕脂を流す○秋風一路行き盡さず、白雲紅葉山河に映す○石徑斜

に通ずるところ、楓葉霜に飽て蜀紅の錦を織る○千山萬壑悉くこれ紅雲○紅雲簇るところ、杖をとめて佇立すれば、夕陽靜かに虞淵に没す○遠山近嶺悉く紅葉、遠きはいよく紅に、近きはいよく黄也○その色さながら處女の頬の紅を染めたる如く、その葉恰も稚兒の手を擴けしに似たり○風吹て紅葉溪流に落つ、流水殿に激して飛沫花と散るところ、紅葉紅の渦を巻く○山上水涯、風樹林を成し、葉は正に霜に飽きて雲錦參差。

○秋果

○栗くりや、その膚はだ、その葉はのガサくとして朴訥ぼくどつなる、殆んど野人やじん也
 如何いかに巧こう言げん令れい色しよくを嫌きらへばとて、毳いの兜かぶとを被かり、厚皮あつかはの鎧よろいを
 着ちやくし、澁皮しぶかはの鎖帷くさりかたびら子こまで着込きこめる、あまりに用心ようじんぶか深ふかからずや
 ○密柑みかん、市いちに上のぼる、雲州うんしゅうの産さん、紀路きぢの産さん、天下てんか無双むさうの名なを擅ほしにす
 ○風かぜは落葉らくえふに吹ふいて、季節きせつ十一月じゅういちがつに入り、東都とうとの鞠まわり祭まつり正ただに近ちかし、
 予よはこの祭まつりの近ちかづく毎ごとに「沖おきの暗くらいに白帆しろほが見みゆる」あれは紀きの國密くにみつ
 柑船かんぶねの俗語ぞくごを思おもひ出いで、轉うたた紀文きぶんの一代だいの膽勇たんゆうを想さう起きせずんばあ
 らず。

○鮎あな

○篁くわう左さの細流さいりう、水碧みづあをく波靜なみしづかなるところ、鯽しよくぎ魚おとつ躍あつて水みづを撲うつ○泥てい
 池水ちみづ濁にごりて茨菰じこ繁茂はんもするところ、鮎あなあり、水みづに唼けん喁ごやうす○後庭こうていの園えん
 地ち、荷葉かえふ漸やうやうくに敗やぶれんとす、鯽しよくぎ魚おと友ともを逐おふて池水ちみづに浮うかぶ。

○沙は魚ぜ

○空そらには雁聲がんせいあり、月つきいまだ上のぼらず、秋氣しゅうき肌はだに迫せまていじやううに坐ざし、
 綸りんを投なずれば水面すゐめん靜しづかに細漣さいれんの來きたるが如ごとく、糸いと忽たちまちうごに動うごくを覺おぼゆ、
 引上ひきあぐれば即すなはち沙魚はぜなり也○霜しも稍やう白しろき堤上ていじやう、月つきを踏ふんで歸かへりゆく人ひと、そ
 の手に魚籃ぎよらん提ひげつ、喜色きしよく滿面まんめん、知しるこれ沙魚しやぎよの大漁たいりゆう、溼漈はつじつとし
 て籃中らんちゆうに跳おどるを○沙魚はぜや、その姿すがた頗すこぶる醜しゆう、而しかうしてその肉にく頗すこぶる

美、何ぞその對照の奇なる、その一たび調理せられて、秋涼晚酌の膳に上る、誰か舌鼓を打たざるものあらんや。

○ 鴨

○ 村雨松風、秋まさに老い群鴨眠を食つて沙草の間にある
○ 微雨斷續、櫓聲を送り來り、白蘋茂きところ群鴨眠る○江頭群鴨あり、汀前の蘆荻風なくして動く。

○ 霜

○ 白露三更 半はこれ霜 庭前の風物轉た荒涼○江上風寒く

行客稀なり、滿庭の霜露征衣を濕す○板橋霜冷かに人の過ること少也○霜氣衾に入りて夢驚く時、凍鴉鳴き散じて夜まさに明けんとす。

○ 暮 秋

○ 柿葉風なきに謝し、野花一輪柴門に半 萎みて、秋はこれより
○ 暮鐘前川を渡りて秋雲後山に奔り、天地蕭條、冬漸くに近からむとす○雨は濺ぐ落葉の前、涙は落つ孤燈の後○風は吹來りて海を荒し、山を騒がし、木の葉を掃ふ、空色、木葉の響、凡て一種凄凉の風趣を覺ゆ、秋まさに逝かむとすれば也○蕭々とし

て風渡り、天地忽ちに寂寞○悲秋九月、塞外草衰へぬ○風積
寒くして肌を刺し、木葉梢を辭して空中に舞ふ○寒鴉暮林に啼て
秋こゝに逝かむとす○霜枯れの叢間には虫の音漸くに細し、吁これ
行く秋を惜むの聲也○紅葉も散りぬ、虫の音も絶ゆぬ、柳も枯れぬ
七草も褪せぬ、月の色稍物凄うなりて、野邊には霜漸くに滋し、
九十の秋光こゝに暮れゆかむとす。

▲十一月

○時雨

○天津乙女の雲がくれしをいたみてか、降りくる時雨の殊に頻りな
る、これや天津御神の涙ならむ○日は薄絹に包まれたる様に兆薄
く、山莊と打けぶり、落葉勝なる木々は打しめり、空氣はうつとり
として重し、恰も春陰に似たり、たゞ寂しきのみ。

○木枯

○碧空朗らかにして日色晶々たり、何處より如何にして風は
吹くぞと怪しまるれど、眼を注ぐところ、海も、山も、人も、草木
も、自ら持する能はずして、狂奔し、悲鳴し、動擾す○静かな
りし世の中、俄かに騒ぎ出でたる心地して、急に立出て見れば、既

に風の吹き始めたり○聞けよ、海に荒れ山に騒ぎて風の吹き來るを、吁これ革命の聲か、破壊の叫びか、否、これ一陽來復の將に近づくかんとする建設の叫び聲也。

○落葉

○栗も、銀杏も、桑も、楓も、掠も、榎も、皆落葉して月夜にはその影限りもなく地に亂れ、踏分け兼ぬる心地す○庭の李樹の葉は落ちて、搓拵たる枝の縦横に青空を嵌みたるに、梧桐にや、大なる枯葉の一つ落ちかゝり、尙落ちもやらで静かに日光の光りなるもおかし。

○寒月

○日は已に暮れぬ、唯見る目には霜天の纖月、唯聞く耳には寒山の疎鐘○纖月寒梅を照して美人の眉の如く、疎影窓障に寫りて佳人の立てるが如し○戸を開けば寒月晝の如し、風は葉もなき万樹をふるひて、飄々、颯々、霜を含める空明に搖動し、地上の影、木と共に搖動す、其處此處に落ち散る木の葉、月光に閃いて、簌々、々、玉屑を踏む思あり。

○千鳥

○千鳥！、何ぞその名の風雅にして、その聲の哀婉なるや、我れ
頭に立ち、波に砕くる寒月を浴びて汝の聲を聞く、さながら悲の
征矢もて我胸を射らるゝ如き心地す○天雪ならんとして海波岩に激
し、飛沫花と散るところ、千鳥一群、斜に飛ぶ○夜風は寒く身に沁
む鴨の川原、誰が心を慰さめんとてか千鳥啼く。

○鯨

○十数の森を脱して、巨鯨海底に入る○鋭鋸、巨鯨を斃して、見
よ、一郷の富を賀せるを○小銃その勢、猛烈にして能く巨鯨を逐
ふ、これ海底の一奇觀也。

○氷

○寒風地塘より吹いて、水忽ち瓊玉となる○西伯利亞原頭風
寒くして、見よや烏港の海上、一面の白玉○池面堅氷あり、鯉魚
水底に遊ぶ。

○冬景

○斷橋の上に立ちて、冬の日の水の流を聞けば、さらりと絹を捲
くにも似たり、これ神が秘密の囁きか○あはれ蕭殺の冬の神よ、暫
らく汝の風の劔を收めよ、見渡す限り草木は枯れて、空しく地

に委しなを○仰げば残月一痕まだ水色の空にあり、朝餉たく泊
舟の烟、縷々として江上にたなびき、空中に漂ひ、斜に霜白く
置きなしたる屋根のほとりに消ゆく○枯葦、枯蘆、かさこそと吹
く風に鳴れば、何とかいひげむ名も知らぬ鳥の、やかましく啼きつ
、飛びゆくを見ぬ○風は劔の如く、雲は氷の如く、樹は明らかに
山白し。

▲十二月

○雪

○高きは林が、低きは野が、唯一面に白く、なをチラ／＼名残をふ
らす曉の空、岡の片蔭に破れ硝子に薄氷に、縁を取せし小澤近く
古たる梅樹、下は幹を染分け——上は「紅葎」を包む——雪○まん
じ巴と降りしきる雪は風と伴ふて宙を舞ひ、下には荒磯の岩砕く
怒浪たがひに、揉みつ揉まるゝ濱邊に眞白き一面の遠見は、宛がら
勇士の戦場に踏出で、荒れたるが如く、一きは勇ましく健氣にて、
おもひやるへき座の動く心地するなり○見あぐれば目馴れし蠶々も
俄かに厚化粧して、笑ひかけたる半窓より幽かに漏るゝ三絃の音は
憎くやいづこの何者が浮世の外なるらむ○玉樹銀梢燦として眼を
奪ふところ、神女白衣かして白扇を持し白き袖を翫へしつゝ舞ふ

○遠山には群鴉集り、老樹には玉龍蟠まる○山路行人絶ゆ、掃
はず柴門の雪○滿地銀一白、茅屋化して水晶殿となる○瓊林瑤樹
白花を欺き、天地の間さらに一點の塵埃なし○飛雪霽れて一望まさ
に皚々たるところ、曦光三竿、燦としてこれに映す○寒威冽々とし
て北風怒號し、六花紛々として鵝毛を欺く○雪はまことに花とまが
ひ、池の氷は鏡と見ゆ巖の上に花は咲く○松の雪だに消ゆやらで
苔の細道幽かなり。

○寒威

○四隣沈々人聲なく、唯瘦犬の寒に苦しんで遠く寂寞を破るある

のみ○萬籟闕として聲なく、寒威凜冽として孤枕眠りなり難き時
飛雪霽々として破窓を打つ○朔風面を刮り、返寒指を墜す○風は颯
々として雪、窓を打ち、寒氣人を侵して烈、骨を刺す○嚴霜既に降
りて堅氷至り、毛髪ために蝟の如く手足凍はて龜の如し○冬なる
哉、雪を帯ぶ茅舎の影寒田に宿れず、田も半ば氷りぬ、林には波
の吼ゆるが如き音あり、冬の聲なり、殘雪を帯ぶる枯蘆のがさく
と鳴る音乾きはて、枯れ果て、吾魂を爬き破る心地す○砂山の松を
穿ちて野に出づれば、北風飄々、鬢を吹き、ステツキ持つ手龜まん
とす、空には凍雲漫々目の到るところ山も野も枯れに枯れぬ、野
川の橋を渡る頃、曇りたる空より粉の如き飛雪紛々として來りしが

程なく已みたり。

○歳暮

○雪聲地に満ちて年こゝに暮れ、爐火灰となりて夜已に深し○弊衣寒裘、唯我が思想の上に蝸牛の運びをなしつゝ、陋巷のうち、こゝに歳を送る、年よ、心あらば我が白頭を憐れめよ○寒窓除夜に遇ふ我殘灯に對して恨なき能はず○吁幸福なりしこの年よ、望むらくは來ん年をして亦かくの如くあらしめよ○烏兔匆匆々々年今宵に迫りて萬感胸に襲ふ、吁我碌々としてこの一年を送りたりき○晴れず曇れど降らず、鬱陶しき年の暮なり○霜枯の草を踏みて野外に立て

（天地）

▲天象

○天

は、一望寒草蕭條として枯蘆風に戦ぐ音、葉もなき川楊に轉る鶴鶴、水涸れし野川の音、昔年のゆくゝ暮れなんとするを語る

○満天水の如くに碧玲瓏○のどやかに颯なる空○白露天に横つて氣殊に清し○雲の波、烟の波は晴れながら、尙薄曇るは所謂花曇りか○遼遠なる哉、蒼天、渺茫としてその際涯を知らず○萬

里の長空〇横雲の薄紫に染めたる朝空〇山に邊あり、水に邊あり
草木國土いづれか邊あらざらむ、唯天これ邊なき也。

〇日

〇日は紫の雲間に出で、萬縷の金線光彩陸離、浮雲これに映じて、或は紅、或は紫、大空の美觀は即ち是〇五彩の麗雲油然として起るところ、金烏燦然として黄金の光を射る〇朝日は天の光榮を載せて、薄紫の雲間より輝き始めたり〇日影はうらくと照り榮けたり、今日もこれ天は平和なるべし〇日は入りながら、影は尙海に残りて波を彩る〇山紫に水明に、金烏西山に没す。

〇月

〇世に月雪花を美中の美と並べて賞めるが、雪も花もごうして月の美に及びませう、露も垂るかと思はれるあの、照々とした限なき光、まあ何と言つて賞て宜のでせう、あれぞ天地を撃ぐ微妙の糸で夢を奏べる無聲の音色には、鬼神も感ずるかと思はれます、美とは何ぞと人が問ふなら、月の命と答へませう〇月、湖心に碎けて玉兔波に躍る〇長烟一空、暉月千里、浮光金を輝かし静影壁を洗む〇獨り江樓に上り思ひ渺茫、月光水の如く、水天に連る〇水心明月湧き、萬頃盡く金波〇白鶴一聲、月華上る〇一片の殘月、

見よ、西に沈みつゝあるな○玉兔○月華、白雲遠く散じ盡して、月
色さらに玲瓏○月に、朧にさし出で、山の端白き松の風、枝をなら
さぬ木の下に○臥待の月、わづかにさし出でたる、心もとなしや○
月は皎く斜窓に入り、燈は暗く破机を照らす○明月皓々として
長江を照し、笛聲朗々として水を渡る○蒼々たる深淵、月影を浮
べ、皎々たる玉兔、老杉を照す○明鏡高く懸りて天に緋雲なし○
清光遠く林間を透し、長芒曳いて湖心を射る。

○星

○北斗七星、その光燦たり○見よ、流星は長く青紗の帯を曳いて

その落つるところ何處ぞ○北斗七星、爛として水を射、波紋忽ち銀
色を湛ふ○茫々萬里雲晴て、星斗闌干、光芒燦々として明又
滅。

○雲

○白雲、跡をうづめて往來の道も定かならず○昨日は都を東嶺の、
霞と共に立ち隔たり、今日は旅を山陰の雲に引きかけて、西の國
へと赴きける○雲、海を包みしか、海、雲を包みしか、見よや、水
これ空にして、空これ水の奇觀を呈したるを○雲行忽ち天に向ひ
て、劔拔、萬丈二山の間に白雲、壁を築けり○國根の一峰に雲起

りぬ、はじめに膚寸の大きなりしが、谷ひらけ、風加はりて漸く擴がり、はては八峰の全面を掩ひて、轟然として西の方にたなびきぬ○浮べる雲は灰色より紫色に、紫色より暗色にかはり、雲縁は茶褐色もしくば洋畫に用うる「セピア」の色彩に似たり○秋風起り白雲飛ぶ○雲や月を飲み、雲や月を吐く、月や雲にかくれ、月や雲を出づ○雲、水を包み、水、雲を離す○四時、朝暮、俯仰して百變の態、盡く状すべからざるは、則ち雲なり○陰雲低く漂ふて海風肌に寒し○水聲、松籟、送りまた迎へ、人は白雲深きところに向つてゆく○炊烟一抹白雲の中。

○ 曉

○曙色霽れて、見よ、天地山川草木、乃至人間のあらゆる社會、これより希望の境に入る、かの黒闇々たる夜の地獄を脱して○鷄鳴残夢を破り、曉鐘水を渡りて到る○洲崎に噪ぐ千鳥の聲は曉のうらみを増し、磯間にかゝる掛の音は夜半に心を痛ましむ○残月斜に樹梢にかゝり、曉鴉一聲、天漸く明く○嶺は既に旭光を沿びて烟霧早く散じ、溪は雲霞尙深く閉して残夢いまだ覺めず○白露道草にしげく、清風我袖に滋し○東方漸く明けて海波焼くが如く、巒嶽靜かに横ばりて宿雲いまだ散せず○曉風吹くと

ころ冷氣清し、殘月没するところ紫雲たなびく。

○夕ゆふ

○夕陽西に洗んで、見よ、樹は紅に、山は翠なり○一聲の牧笛
歸牛を認むるところ、首を回せば西天日まさに没せんとす○巒峰雲
に飽きて暮色遠きより到る○晚鴉一聲、樹を掠めて西す○遙かに
江上漁火の明滅するを見れば、暮靄天地を封じて萬目模糊○見よ
光彩なき太陽は、紫雲の帷の如き暮嵐と、綿帛の幄に似たる織雲
の間に埋もれ行けに○暮雲山に歸りて山斜陽に映す○日は西山に
没して餘光横さまに照す、杳として暗きは遠村、茫として淡きは近

郊

○夜よる

○夜深くして孤枕夢さめ、燈を挑げて書を緝けば、萬感胸に迫りて
轉た斷腸に堪へず○夜は、墨よりも黒ろし、色と形とを没す、夜は
悪魔よりも、悪し、善と美とを没す、夜は善人を悪人となし、悪
人を更に悪人となす、星は夜を世界の中に碎かむとし、月は、夜を
世界の外に追はんとす、若し此世に月と星となかりせば、夜と悪魔
とは如何に喜ぶべき、神と人は如何に悲しむべき○一穗の寒燈朦
朧として孤衾冷かに、遠寺の鐘聲幽かに響いて轉た凄然。

○虹

○九天高く五彩の浮橋を架す○陰霽定まりなく晴また雨、雲間を洩る、斜照、晴に虹となる。

○風

○科戸の風○山嵐吹き断す白雲の峰○涼風圓蓋を吹いて薰香衣袖に満つ○天飈一陣、星落ち、雲散す○朝は芙蕖の白雪を吹き、夕は琵琶湖の青波を訪ふ○薰風来る、いづれの處よりぞ、見よ、その風の薫るところ、黄金づくりの太刀佩ぎし小冠者一人○寝亂れ髪を吹

○雨

く朝風○颯風、潮を捲けば、波忽ちに怒りて巨巖を噛む○風、忽ち石を轉ばし、大樹を抜く、聞け、千叫萬喚の聲、これ冤神の叫喚にあらずや○風威猛烈、樹木を抜けば、砂塵旋回してこゝに渦水を形づくる○旋風一陣襲ひ來つて、怒號狂奔、乾坤爲めに晦冥、家屋を破り、樹木を折る○倏忽にして横さまに萬里を過ぎ物悉ごとく靡くもの、これ風也。

○雨、花に濺ぐの雨は、これ空間に泣く佳人の涙か○雨は暮時に簾々として、甲古の旅客、心魂を断つ○雲立ち、驟ぐよと見るまに、雨

ふり来る○細雨疎々として到り、烟は橋を繞りてこめ、雲霧山河を
蔽ひて、陰々また漠々○烟霧四方に湧きて江山杳々、雲飛び風起
りて、急風篠を束ぬるが如し。

▲地文

○山

○實に一萬三千尺の富士の山の夕日を負ふて、影を大地に曳ける、
其の壯大雄偉の看は言はんと欲して言葉を忘るゝばかりなりし、駿
河・甲斐、相模、武藏の山ともいはず野ともいはず、濃紺もて鮮や

かに描き成したる富士の影、垂天の鵬翼とも仰ぎ見るなる其の下陰
の町や村や、人は周章し一黄昏の、燈火を呼ぶならむ○函嶺より望
めば、晴巒雨峯を壓して高く雲漢を抜く此の山あり、上峰は五朶
を成せり、上青天と連り下白雲と接す、車の行くに従ひて四朶
となり三朶となり、既にして復た四朶となる、雲は日を得て雲母の
色をなし、陰は紫嵐を凝らせり○洞を環りて劍が峰 欽ち、雷岩
欽ち、白山 岳 欽ち、久須志が岳 欽ち、中將 岳 欽ち、成就が
岳 欽ち、三島岳 欽ち、駒が岳 欽ち、八峰の陰皆な雪あり、其の峰
を瓣にし、其の洞を蓋にし、萬古の氷雪これを澹粧濃抹して斯の玲
瓏たる玉芙蓉をなす○瓊岩秀を競ふて奇峭を極め、白雲斜に其

頂を掠む○鳥徑羊腸崎嶇○碧嶂丹巒嶙峋として天に撃し、見よや、その衣は彩霞、その帯は白雲○突兀千仞、殆んど天を摩す○翠を攢め、奇を争ふものは秀峰なり、嵐を疊み妙を競ふものは峻嶺なり○嶂巒屹立して巍然奇を争ふ○高巒深谷、喬木天に朝し松杉蒼鬱として晝尚深し○仰いで顧盼すれば峰巒四周、雲霧冥濛として白日を見ず○峻嶺參差蜿蜒として國境を緩る○俯して脚下を瞰れば雲絲縷々として谷を出で、須臾にして膚合し、鞋下皆白し○足曳の山○山深うして人跡稀なり○千山霧に閉され萬水霧に包まる○視あぐれば百尺の青嶂、雲樹天を障へ、見下せば千仞の碧岬、水波石に激す○或は高根の雲に枕を欱て、苔の莛に袖

を敷き、或は岩漏水に渴を忍びて朽たる橋に肝を消す、山路もとより雨なうして空翠常に衣を濡し、見上れば萬仞の青壁、劍を削り、直下せば千丈の碧潭藍を染めたり○直下せば深谷地を帯て篝火青苔の岩に閃めき、向上れば高嶺天に横ばりて遊魂暮雲の中に呻よふ、離々たる路傍の草の花は紅にして戰死の鮮血を染たる如く乗々たる谷陰の白骨は半ば朽て老杉古松の肥となりぬ○山ふところはおのづから朝日の影遅ければ、樵夫牧童にだもなほ遣はず、鳥は緑樹に隠れて聲いよく高く、雲は青巒に起りて行方いまだ定まらず、げに静けきは山の徳なり、名山の靈峰いづればあれど時に取ての佳境かな○松柏影を浸して青山も崩るゝ如く、岩石流れ、徹

して白雪の 融るに相似たり○深谷の地を帯れる、崖岸の 状を見
かくれば、鑿もて穿なせるが如く、高嶺の天に横たふ、崗巒の勢
をうち仰げば、刀して削れるに似たり、烟霞の子細なる、泉石の
分明なる實に天上の靈奇にして、人間の絶妙也。

○川

○他所の時雨に水増して逆浪高く漲り落ち、淺瀬は何處、ありやな
しやと事問ふ渡守さへ見へざれば○峻嶂宛轉驚濤の如く、巖
下の滴泉 啣々として、秋雨の屋檐に鳴るが如し○河上の雪消に水
増りて淵瀬は見ぬす○溪流 鏘々として山谷の 間に反響し、 恰も

笙簫を聞くが如し○おぼつかなくも落ちてゆく谷川の 水定めなき人の
行方○溪水は幾度か曲折して奔流し、石益々大に、水いよく激
し、水は石を噛み、石は水を搏ち、水叫び、石嘯き、珠玉 迸り
雪花 灑ぐ○露ふかく秋老來ぬる隅田川、長堤十里其所此所に落ち
しく春の紀念なる枯し櫻葉紅葉して、啣く虫の音菊の花、桔梗、撫
子、七草觀、筑波の峰も富士が嶺も、霧たちこめて見ぬ分かず、た
ゞ澄み渡る浪の間に、ありやなしやと言問し、昔し語りの都鳥、今
を待得し風情なり○溯水 濼々山麓を繞り、濼々の 響耳に入る○
俯して眺むれば滔々たる溪流 白帶の如く、洋々 茫々として海に
注ぐ○清川亭後にあり、青柳垂れて其色深し○濁水 岸を噛む○水勢

矢の如く、じんらいほ 雷吼ゆ てうりう 長流千里 おんかけきりう 巖下激流あり、とき 時に巖頭に花を碎
 く みづせ 水は瀬まくらに轟きて、りよたいふ 三閼大夫が恨み想像るべく、まつ 松は峰上
 に吟じて有馬皇子が無常を示せり よ 夜は更けたり、けうせうひとまれ 橋上人稀にして
けうとういへ 橋頭の家、灯まさきに滅す、てんちせき 天地寂たるの時、ひこ 獨り江水の潺々として
なが 流るゝあり こほり 氷を出で、みづこ 水肥れたる溪流、かんく 涇々として清冽玉の如
やまふか し じんせき 山深くして人跡なく、すいせいせんく たゞ水聲の潺々たるを聞く心かけひの水
みづ 水の色は純白、せいなり これ性也、しか 然れどもその相合し相重なるや、こよ 茲に
しんらんしよく 深藍色となる かちうがんせきおほ 河中岩石多く、みづ 水、いし 石と相闘ひ、とき 時に急湍
ほんらいつく 奔瀨を作る きらいかすいわら 歸來河水笑つて刀を洗へば、ち 血は奔湍に迸つて紅雪
は を噴く こうしん 紅心 なみしつか 浪靜にして かんがる 一竿輕く、かくしうつな 客舟繫ぐところ せうせいうご 鐘聲動く つき 月

ちうりうてら は中流を照して高く上り、かせ 風を江心を吹て きんぱくた 金波碎く つきくら 月は暗し じんやう 薄陽
こうどつゆふべ 江頭の夕、ふね 舟は蘆花淺水の邊にあり しんせんやうく 春川漾々、しうこうせきく 秋江寂々 らくじつかんこうたごよ 落日寒江に漂ひ、きんぱれいふう 金波冷風に碎く しゆんこうみづ 春江水は あたゝか 暖なり かもねむ 鴨眠る だいこうてん 大江天に接して、くも 雲まさきに迷ふ こうそん 江村いづれのところか れうがん 兩岸の蘆
どうかす 一灯微かなるほとり さよせう 漁唱を聞く。

○海

ひ 日は西に落ちたり、なみ 波を彩る斜照の名残も何時しか消れて極目
べうえう 渺沓なる いんどやう 印度洋は、めん 一面に蒼然たる ぼしよくおほ 暮色の覆ひ つみ 單み、せきばくやぶ 寂寞を破るは
たじわ 唯我が きせん 汽船の しづかなみ 徐に波を截るあるのみ きのふ 昨日の はくむ 白霧は そら 空に なごり 名残を留め

て、日光弱けれど海うみの面おもては水すゐ平線へいせんの際きはまでも青々と緑を展
べて、北きたより吹き来る微風ひふうの水面すいめんに皺ひだを疊たむのみ〇渺々べうべうたる滄海さいかい
水みづ遠とほうして船ふねたかく、峨々がごたる青山せいざん風暴かぜあらしうして松まつひくし〇鳴門なると
さして往ゆの舟ふねは、片帆かたほは雲くもに測さかり、烟波眼えんぱがんに茫々まうまうたり、萬里ばんり漂泊へうはく
の愁うれひ、一葉えふへん扁舟しゆうの浮うきおもひ、浪なみなれ衣袖ころもちて、涙なみだ忘わするゝばか
なり也〇長風てうふう八月がつ、海かい若驕じやくおこる〇一葦いつい海水すい〇一葉えふの扁舟へんしゆうに棹ささば、
海面かいめん風かぜ静しづかにして浪なみだ立たず、漣れん漪い舟ふねを叩たたいて、水花みづばなを散ちらす〇海
は巨靈きよれいの手に撮つまみ上げられるかの如ごとくに、逆立さかたちつゝ、見みよや、横よこさ
まに半里はんりもあらん大濤おほなみ、白しろき蟹たてがみを振ふるひ、白しろき火花ひばなを散ちらし、陸りくを
眺ねらふて眞ま一文字もんじに寄よせ來きたらんとす〇灰色はいいろの空そらは低ひくく海うみの面おもてに舞まひ下くだ

ると見みるや、吹ふきあぐる汐しほ烟けりか、たゞしは雲くもか、或あるは霧きりか、蓬ぼう々々
として連しりに北きたに走はしる〇風かぜは海うみを嘯かり、海うみは風かぜを挾さみ、一灘なの水みづ
を一灘わんに押おし寄よせんとす〇空そら高たかく海うみ渺々べうべうとして風かぜなく、波なみなく、夕ゆふ
日の光ひかり獨ひり此間このかんに滿みつ〇日ひは西にしに廻まつて、海上かいせう、自金はくきんの柱はしらの横よこは
るを見みる、時ときや、この時とき、北風ほくふう陸りくより吹ふいて、海面かいめんために細さい澁せを疊た
み、雲くも、天心てんしんより東南とうなんに走はしりて白銀はくぎんの波なみを大空たいくうの碧あざに打うつ〇春はるの海うみ
溶々とうとうとして漾々ようようたり、或ある所ところは大おほなる蝸牛かたつぶりの這はひたる跡あとのやうに
滑なりて白しろく光ひかり、或ある所ところは億萬おくまんの鱗りん族ぞくざわめくやうに青あく頭かみへり〇上かみ
は懸崖けんがい、下しもは海うみ、行人かうじん一歩いっぽを誤あやまる時は、忽たちち數十丈すうぜうの絶壁ぜつぺきを眞ま
逆さかさまうみおちて、海底かいていの岩いはに頭かみを碎くだき、若もしくば水死すいじ婦人ふじんの髪はつの

如くに滑めり、擦げる海草に手足をからまれ、氷の如き潭水に痲痺せられて人知らぬ死を遂ぐるの外なからむ○日落ちて、天黄に、海また天を蘸して黄なり○見よや金帆二三、島影に隠現するところ、水鳥あり、洋上に大なる圈を畫いて飛ぶ○帆にまかせて北海四五里が程出づる處に、北の方の雲を天と接せしところ、いと黒くなり、上弦の月入るほごに、その色ますます怪しくして風や、變れば、水主共に氣遣ひて、夜明くる頃には西風や落ちん、東風にや變らんと口々に評議す、これを聞くに彌おそろし。

○海濱

○濱に立つて望めば、夕陽海に流れて、わが足下に到り、海上の舟は皆金光を放つ○見よや、逗子の濱一帯、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も落ち散りたる藁屑も、皆夕陽に照されて、赫焉として燃ゆるが如し○長洲○浦頭○沓かに見おるせば、鳴照る波の上に丸木の舟、茅の帆影つゞきて、白鷗雲に翹るも跡なつかしく、あらめなる岩角に勞し、大津の浦にいでつゝ、矢橋に渡す舟に便すれば、堅田の磯に落雁群がりて、唐崎の風景、松うつ夕雨のけしき鏡山の今宵の月も見ずして、こゝろにうかみ○蘆るれば蘆岸の烟に舟を繫ぎ、明れば松江の風に帆を揚げ○長汀の月に心を傷ましめ、曲浦の波に

袖を濡す○夕べしづかなる磯の眺めにもあるかな、我は詩集を懐に
 して、真砂路に歩む○長汀三里、涼風を宿し、五里の曲浦波花を
 散らす○一帯の青松十里の灣、浪花雪を砕く斷岩の間、水天劈
 髯海千里、天際模糊として翠髪を望む○相摸灘は正南に開いて、太
 平洋の水を吞吐してゐる、逗子灣は灘の東北隅にあつて、西南の
 口を開いて相摸灘を吞吐して居る○洲崎とほくさし出で、松きび
 しく生ひつゞき、嵐しきりに咽ぶ、松のひゞき、波の音、いづれも
 行人の心をいたましむ○熱海より南のかた、錦の浦を傳ふて網代の
 みなとに連る所の一角、これを無見が崎と名づく、嶺然海を抜く
 こと一丈、斷崖直ちに下りて斧もてけづりたらんが如し○海荒く

波高く、入江のいたづらなる、洲ごもにことものもなく、松原の茂れ
 る中より波の寄せかへるも、いろくの玉のやうに見ゆ○青蘆洲あ
 り、蘆洲の上には松生い、松の下草には赤百合、撫子、日あふぎな
 ど咲き、虫聲晝も聞ふ、洲のあたりは皆軟砂なり○南面うちひら
 けて、三保の松原、前につらなり、磯の巖に鶴の翅ほせるなど、
 わざとならず面白し○須磨の浦曲に秋風たちて、置きそめたる白露
 も分別ありてにや、取りわけて古戦場の草に繁く、無官太夫の墓
 荒れて、虫の音いと憐れを添ふるの夕○磯の盡端に行けば、此處
 は潭深うして然も水は緑玉の色に澄み、かぢめ、もく、みるなど
 さまぐの海藻波のうれるまゝに悠々と躍き、日光の金糸を落し

て水底に綾を織れるも美しく、べら、かさご、とらばせ、かわはぎ、
 なご磯魚の岩を出で藻に隠れて往来するあれば、紅の海松、朱色
 のひとで、紫色のがぜ、緑色のいそぎんちやく、茶色の雨虎など
 動植物の分界怪しきもの共の此處其處に水を彩どりて、水中の
 春は陸上の春よりも却て美はし○半島一帯の青黛は、雲か山か、
 髣髴として烟霞の裡に見るべく、前面の島嶼は白銀盤裡の青螺點々
 たる如く、海上僅かに十数丁を隔て、呼ば將に應へんとす、左
 傍には突出せる岬頭、斷崖危巖、悉く指點すべく、右手には長
 汀曲浦の青松白沙、宛然畫圖の觀あり○空は次第に紫色に濁
 りて、生温かき南風面に吹きぬ、漁師等が濱に走り出て來りて、

忙がはしく網を收むる程に、雨ばらくと降り來つ○磯邊に藪々た
 る響き絶えず、亂礁奇巖を嚙むの激浪、散りて白玉の露を碎き、巖
 上の飛沫雨の如く濺ぎ、霧の如く舞ふ○汀海斷續の處、波濤激亂
 靈洞あり、寄窟あり○灣頭に至れば、風和かにして波穩かに、青
 螺碁布、これを盆上に浮べたるが如し。

○波

- 風波○金波○銀波○白波○巨浪○濁浪○白浪○怒濤○雲濤○風濤
- 奔濤○浪花○激沫○飛沫○風は怒りて浪狂ふ○水は飛び浪は躍り
- ぬ○巖頭波驚いて飛沫月を掠めぬ○岸打つ波の音たかく○磯ぶ

り○岸頭がんどうに鳴り渡わたれる怒濤どたうの音ねは、四面めんの松濤せうたうのひゞき相和あひわし○鞆たう駮たふなる濤聲たうせいおこり、岩いはや、岸きしや、眞砂地まごごやや、白しろき水泡みわわの花はなを咲さかしぬ○あゝ狂濤けうたう、あゝ狂濤けうたう、おもしろきは狂濤けうたうの姿すがた、うれしきは狂濤けうたうの聲こゑ。聞きけよ、その聲こゑは六呂りくり六律りくの調しらべにあらず、見みよ、寄よせては返かへす奔馬ほんばの状げう○山やまを呑のまんとするの巨浪きよつうは、危巖きがいせう怪礁たかと戰たたかふて崩ほう潰くし、餘瀾よつしはいよく怒いかつて絶壁ぜつべきを撃破げきはせんとす○浪花雪らうくわきを碎くだく○濤聲たうせい屋おくを繞めぐりて百雷ひやくらい轟とどろく○狂瀾けうらん洶けう湧う天てんに朝あし、怒濤どたう澎湃はい巖いはを噛かみ、轟とどろ々とどろく吼こゝろ々とどろ、恰あたかも百萬まんの鐘鼓せうこを一齊せいに撞せう搗くわするに似にたり○波なみといふ程ほどの波なみはなくて、唯ただ揺々えつ々たる海うみのスワエルは衣ころもの皺しわをも熨のすやうに、一づつ宛おしよずうと押寄おしよせ來きたりて、磯いそに碎くだけ、岩いはの凹窪くぼみに入り

てはたぶりと響ひびき、小石こいしに散ちりてはざあと囁ささやく○千波せんばまた萬波まんば、碎くだけても碎くだけてもまた寄よせ來きたる○大瀛たいえいの波なみ○濛よう々ようたる海原うなばらに立たつ波なみの腹はらは黒くろうして背せは蒼白あをしろし○砂白すなしろく松翠まつみどりなる長汀ながてい曲浦まがうらに大波たいは小波せうは蜿蜒えんとして來往らいわうするの風趣ふうしゆ、詩情しじゆ勃々ぼつ々として禁きんじ難がたし。

○島しま

○島しまは葡萄ぶたうの色いろに匂におひ、崎さきは青葉あをばの姿すがたを粧よそふ○沖おきの小島こしまと誰たがよみたりしはつ島しまわたり漕こぐ舟歌ふなうたの、寄よる浪なみごとに聞きこゆるも床ゆかし○名なも知らぬ島しま○風和かぜやわらかに、海面波かいめんなみをあげず、青螺せいら八百畫圖やちひやくわとよりも美ひな也なり○外洋がいよう、波渺なみべうほう茫ぼうたるところ、隱現いんけん浮沈ふちんするもの、これ幾點いくてんの青螺せいら

也。

○湖 (池沼澤等)

○北風池をおとづれて、水漣を起し○雪皓々たる山の姿は、
深碧染むるが如き湖面に映す○池あり、小さけれど底深くして、
龍に住めりと邊りの人はいふ、湖心浪静かにして、客舟繫ぐところ
鐘聲を聞く○湖上暮靄に包まれて、歎乃掉歌の幽かに搖曳するを聞
く○山影倒にうつりて、綠湖心を蘸す○神苑池靜にして、
鴛鴦あり○湖面鏡の如し○水靜かなる池の面○湖上を飛びゆく一鳥
の影なく、鏡面を破る一點の船なし○小々波靜かに咽ぶ琵琶湖畔の

夕、晚鐘おもむるに水を渡る時、我湖畔に佇みて、禪味の近く我
に迫り来るを覺ゆ。

○谷

○奔馬に似たる急瀨は巉岩を衝き、激怒して珠と砕くところ碧潭藍
よりも青し○山は迫り、水は迫り、奇巖溪流を噛み、深潭藍を湛ふ
蓋し其深な幾何なるを知らず○水潺々として湖底に鳴る○君を送つ
て巴峽に到る○夕陽溪間に洗まんとして餘光溪間を射る○谷深け
れば三伏の夏茲まで來らず、涼颯秋の如く、單衣肌に寒し○山峽
漸くに迫りて谷ますます深く、谷ますます深くして道いよく険し

○巖石

○斷崖 ○亂礁 ○稜角井然たる岩石、相重り、相疊みて百條の巖柱となる、中は即ち黒闇々たる一大洞窟 ○懸崖 ○靈洞奇窟 ○海中に斗出せる峭崖、削立十數仞、怒濤狂瀾こゝに寄せ來りて、雪山崩れ萬珠舞ふ ○萬丈の屏岬蜿蜒として海中にあり、さながら、長蛇の如し ○巨巖兀突として海中に聳ひ、翠松屹立して怒濤を嚙む ○奇礁怪巖、散布數を知らず ○一溪皆石、龜なるあり、龍なるあり、虎なるあり、而してその龜なるは匍匐するが如く、その龍なるは天に冲る如く、その虎なるは月に嘯くが如く。

○瀑布

○落ちて碎けて白き水泡の花を咲かせ、散つて亂れて清き珠玉を躍らす ○千丈の飛瀑さながら素練の如く水烟濛々として空に騰る ○奔瀑岩を衝て鞞鞞、天地爲に震撼す、谷を隔て、翠崖綠樹の間、一小瀑布の懸れるを見る、さながら一條の蛟龍まさに雲際に上らんとするに似たり ○雲より落つる ○瀧の白糸 ○音羽の瀧 ○瀑布あり、高さ十數仞、その布八尺、鏘然として潭中に落つ ○飛瀑、風到る毎に珠簾忽ち千絲となる。

○井泉

○井戸車の音、きい／＼と朝寒の空に響く○走り井の○苔むす井○
靈泉○寒泉○石湖、水迸り出で、涼氷の如し○掬ぶ清水○深
林樹影暗きところ、清泉あり○黒闇々たる窟内には、靈泉湧出
して、頗る清冽○巖頭に清泉の湧出するあり、岩青く、水青く、咽
ぶが如く、囁やくが如し。

○森林

○水烟遙かに松林を鎖し、馬追ふ鈴の音近く聞ゆ○むかし何某の僧

正が棲みしとぞいふ巨杉○幹には注連縄引きまばしたる神木の葉は
繁り、枝は榮ねて、晝なほ暗し○男子らしき杉の大樹の、盛々とし
て空を摩せんとするあり。

○原野 (原野、道路、阪、堤等)

○野路の松原○沃野千里、月光隈なし○冬枯の野○八千草の秋野
○月は草より出で、草に入る武藏野○樹立隙なき病葉の、おちば噉
○千年の阪燈は、二十有八層より百六十層なるもの四阪、五阪○阪
路は崎嶇、匍匐して上る○阪路極めて険、羊腸として石逕を上る○
阪路幾度か躡り來りて、匍匐わづかに一場の凹地に達す○故郷路遠

くして、雲立ち迷ふ○繩手道○十里の長堤○九十九折なる山路○兩岸の猿聲啼きつくさず。

○橋

○絶壁に架するの神橋は、柱も、欄も、すべて石造なり○鐵欄○舟橋○獨木橋○石橋を渡りて少しく下れば、左右これ絶壁○淺水○平沙凍 鴨眠り、秋聲吹過ぐ石橋の邊○溪あり、深さ千仞、萬丈の絶壁東西相向ふところ、一道の飛棧高く兩岸に架す○十里の清淮水

○村

落

○夜は深し山下の村○霞の奥の一村○鷗の眠る漁村○漁村の秋○浮世に遠きやま里○三叉の路畔、一村莊○くれ竹の伏見の里。

○城

○敗壘殘礎いたづらに當年血戦の跡を想見せしむるのみ○塹濠深くして蟹缺を磨ぐ○古城春深うして落花紅なり○連城の風雨桃花散る○樓櫓むなしく聳ゆ○城破れて山河在り○城壁破れ、石垣崩る。

○家屋

○柴の扇 ○むぐらの戸 ○竹の柱、萱の屋根 ○構造の古雅、装飾の
 美しい ○室房 悉く洋式にして、頗る壯麗 ○樓閣参差、碧甍白堊
 ○粉牆 丹柱、光彩を動かす ○家はあれども欄門やぶれて、葺造
 戸も絶えてなし ○舊菩提を塞ぎ、秋の草門を閉ぢ、瓦に松生ひ ○垣
 に蔦茂れり ○竹の編戸、松の垣、時雨も風もたまらねば、袂の乾く
 隙もなし ○葎しげりて門を閉ぢ、落葉つもりて道もなし、おとづれ
 傳ふものとは、古き梢の夕あらし、軒もる月の影ならで、答ふ
 人なく荒れ果てたり ○一むら薄の野となりて、鶉の床も露しげく

八重葎のみ門を閉ぢて 萩ふき荒む軒端の風、苔もりかぬる板間の月
 ○住みわぶる菴は軒破れて雨洩しげく、壁落ちて夜風は夢の枕を吹
 く ○釣殿、渡殿、棟梁 高く雙べて、金碧の壯觀眼を奪ふ ○五歩に
 一樓、十歩に一閣 ○殿廡門扉、屋皆銅瓦 ○樸材の柱、萱の檐、二
 間の竹椽、三尺の持佛棚 ○殿閣の壯麗、庭園の秀美 ○秋深けれど
 も東籬の菊なく、門陝ふして五株の柳を見す ○嵯峨の奥、深草の里
 に、松の袖垣 隙もあらはなるに、蔦はひ懸りて池の姿も冷しく
 汀の松の嵐も秋すさまじく吹きしきりて ○垣に苔むし、軒の松
 舊りたり ○春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と見るばかりな
 る、いと高閣の棟にして ○黄金の樓臺、珠玉の殿閣 ○六度高樓

○茅屋ぼうおく

○社しゃ 寺じ

○森もりの鎮守ちんじゆ○鎮守ちんじゆの片割かたぎ○一字うの祠堂しだう、苔こけは蒸むしたり○山さん寺じ人ひとなく
 春はる寂せき寥れう○祇園ぎん精舍しやうしやの鐘かねの聲こゑ○一字うの精舍しやうしやは、これ祖師そしが誕生たんせうの地ち
 ○持佛堂ぢぶつだうとおぼしき檐のきに、檜ひのきの輪まる板いたを額がくにして拈華ねんげあん庵あんの三字さんじあり
 ○五層ごそうの寶塔ほうたふ○山院さんゐん人ひととゞまらねば、樓門らうもんは荊棘けいげきおひかゝり、經けい
 閣かくもむなしく苔こけむしぬ、蜘蛛くもらみをむすびて諸佛しよぶつを繋つなぎ、燕子つばくらの糞ふん護摩ごま
 の床とこうづみ、方丈ほうざう廊房らうぼうすべて物ものすさまじく、荒あれはてぬ○野草やそう雨あめに
 開ひらいて花はなを經けうし、淺茅あさちが露風つゆかぜに散ちりて、おのづから闕伽あかを手かむ向むくる

のみ○青塚せいとう 苔こけなめらかにして石泉せきせん織せん々と流ながれ、白楊はくやう早はやく謝しやして
 落葉らくえふり離り々りたり○茶毘たひの烟けむりたゆる時ときなく、此處こゝに消きゆれば彼處かしこに燃もゆ
 昨日きのふおくれし其人そのひとも、今日けふはまた明日人あすひとに先さきだつ、松丘せうきうのもとには唯ただ
 訪とひし涙なみだにうら枯がれて、誰たが名なを殘のこす形見かたみにやあらむ、苔こけむす石碑せきひ
 雨露あめつゆに朽くちたる卒都婆そとば、路みちのゆくてに連つらな、寶蓋ほうがい幢幡どうばんの斷離だんりせし
 は、枯骨ここつにまじりてうち散ちり、いと物凄ものすこき此このところ。

〓人事〓

○戀れん 愛あい

○おもへば戀てふ悪魔に、骨髄深く魅入られし身は、戀と共に淫
 世に斃れんか、將た戀と共に世を捨てんか○落花情あり、流水豈
 心なからんや○沖の石水に圓まり、鏡も磨て針となる長の月日に、
 眞顔は笑み、笑顔は語るまでになれば○戀ほご世に訝しきものはあ
 らじ、そも人何を望み何を目的に渡りぐるしき戀路を辿るぞ、我も
 自ら知らず、唯おぼろげながら夢と現の境を歩む身に、まして
 や何れを戀の始終と思ひ別たんや、そも戀てふもの、いづこより
 來り、いづこをさして去る、人の心の限は、映すべき鏡なければ
 いづれ思案の外なんめり○戀や秋萩の葉末に置ける露のごと、空な
 れども中に寫せる月影は、圓なる望とも見られぬべく、今の憂身を

つらしと叫てごも、戀せぬ前の越方は何を樂しみに暮しけむと思へ
 ば、涙は此身の命なりけり○失戀の苦しきには、あはれ青春
 の血湧きて○戀は我には生命なり、希望なり○心なき草も春に遇へ
 ば笑ひ、情なき蟲も秋に感ずれば泣く○戀しく、つらく、なつかし
 き○勇士の及も切らんに術なく、あはれや鬼を挫がんする阪東一の
 剛のものもいつのまにか、戀の奴となりすましぬ○女子の命は
 唯一つの戀あらゆる、此世の樂、望さては優にやさしき月花の
 哀れ、いづれ戀ならぬはなし、胸に燃る情の焔は他を焼かざれば
 其身を焚かんまゝならぬ、戀路に世を啣ちて、秋ならぬ風に散りゆ
 く露の命業、或は墨染の衣に有漏の身を轟む、さては淵川に身を

棄つる、いづれの戀の炎に其軀を燒盡して、残る冷灰の哀にあらざらんや。

○容 貌

○花顏雪を欺き、豐頬紅を潮す○容姿端麗、明眸皓齒○身材魁偉、眉目清秀、眼光炯々人を射る○腰は靡く柳の如く、姿は獨り立てる花に似たり○春の花を欺く姿を、何事ぞ、秋の野風に暴して○紅色を帯びしつやくしき頬の色、少しく蒼さめ○身の丈六尺に近く、筋骨飽まで逞しく○眉太く、鼻隆く、一見凛々しき勇士の相貌○年齒は、十六七精好の緋の袴ふみしだき、柳裏の五衣

打ち重れ、丈にも餘る絲の黒髪後にゆりかけたる○眉秀で眼清く、色素くして唇朱く、耳厚くして齒細やかに○面色白くして髭鬚青かり、眉は秀で、遠山の如く、眼は朗かにして雙星に似たり、隆準丹唇、容儀堂々、神表凛々○桃顔あらはに咲みて、皓き齒のはの見わたる、枝おもげなる牡丹花の一村雨の露を帯びたるに似て、なほ艶なり○天性の顔色玉の如く、眼には秋の水の湛へ、口には春の花を開かせ、柳の髪丈とひとしく○窈窕花の如く柔天柳の如く、鬢霞牡丹の如く、婀娜海棠の如し○雪なす足も荊棘にやぶられて土に塗れし筈の如く、盆に顔を照し、水を油に代わて梳ればいとめでたき黒髪も、枯野の薄に異ならず○羅綺にだも

耐へざる貌は、春の風一片の花を吹残すかと疑はれ、紅粉を事とする顔は、秋の雲半江の月を吐出すに似たり。○八十あまり百歳にも及べし、眉は長うして綿花を重れたる如く、齒は暗うして瓠核を連れたるに異ならず、躬は瘦せられたるも健なり、老たりと見ればいと弱かり、眼光人を射て威あれども猛からず、世にいふ童顔仙骨とは渠なるべし。

○哀別

○酔ふて紅樓に別る榻柚の香、江風雨を引き船に入て涼し、憶ふ君が遙かに湘山の月により、愁ひて清猿を聴く夢裡に長からんことを

○いまだ咲かざるの寒梅、狂風のために其蕾を傷はれ、まさに輝かさんとするの新月、叢雲のために其光を掩はる○亡き父母の墳墓に詣で、限りなき血の涙を苔畔の苔に澱ぐ○紅涙わづかに去れば、新愁に到る○野外におくりて夜半の烟となしはてぬれば、たゞ白骨のみぞ残れる○既に無常の風きたりぬれば、すなはち二つの眼たちまちに閉ぢ、一つの呼吸ながく絶ぬれば、紅顔もなしく變じて桃李の装を失ふ○濫焉として逝く、逝くものは水の如し去てまた還らず○悼ましいかな、紅顔の美少年、こゝに白玉樓中の人となる○浮世は憑み少なく、水上の波よりも輕し、形体保ちがたく、樹頭の花よりも脆し○生者必滅の習ひ遁れがたく、奴ち髪婆

舊里を去つて、獨り黄泉の旅に趣く○暮れゆく秋の夕方に、婆の
舊里を立出で、不生不滅の道にゆく○皓々たる秋の月は、新に諸
行無常の花に輝き、蕭々たる木の葉は、はやく寂滅爲樂の臺に
布く○常香盤より鬘鬘と立のぼる香の烟りは、補陀落山の雲かと
疑がひ、うち鳴す木魚の音は蕭然として祇陀林に降り沃ぐ雨にも似
たり○病の霧に犯されてあはれ夕の露と消ぬ○夢かと思ふ夢
ならば、覺めよ浮世の泡沫無常○

○旅行

○晝は野原の草に隠れて、鶉の床に涙を忍び、夜は孤村の辻に

みて咎むる里に犬に驚く○逢阪の關守に許されてより、秋こし山の
黄葉見過しがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、富士の高嶺の
烟、浮島が原、清見が關、大磯小いその浦々、むらさき匂ふ武藏
野の原、鹽竈の和たる朝最色、象潟の蛋の苦屋、佐野の舟梁、木曾
の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなき○日暮れ馬なづんで、前途程遠
く、遙かに故郷の方を顧みれず、秦嶺に雲横はりて來らん方も覺
ぬす、憚んで萬仞の峻きに登らんとすれば、藍關に雪みちて行く
べき路の末もなし○蘆が散る浪花を経て、須磨や明石の浦ふく風を
身にしめつも、ゆく／＼讚岐の眞尾阪の林といふに、しばらく蹄を
駐む○はきも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露おしわくる旅の

空、けふは時雨しぐれて袖そで重おもく、きのふは晴はれて笠かさ軽かるし○信濃路しなのぢさして日ひに歩あゆみ、夜よは宿やどりつゝ草くさまくら、急いそがぬ身みにも旅たび馴なれし、袖そでは露つゆけき小笠原せがさはら、岐祖きその御阪みさかもうち過すて、うきみの末すゑは友人ともびとに、あふみと聞きくも頼たのもしき、峰みねの楓葉もみぢはいろ色いろはませども、花はなの洛みやこに近ちかづきぬ○過くわ雁がん、暮くれに鳴なき、遠山里とほやまさとは紅葉もみぢして時雨しぐれの雲くもの愁うれひさへ、身みに染しむ旅たびのから衣ころも○平沙萬里へいしやり、朝あしたに滔たう々くたる大河たいかを渡わたり、夕ゆふに峨あ々べたる巒らん峰ほうを過すぎ、路ろ程ていに友ともなくして憂うれを慰なぐさむることもなく、客舍かくしや燈とも暗しくうして、愁影しうえい猶なほ加くははる○旅館りよかんの燈火ともがすかにして、鷄鳴けいめい曉あかつきを報ほうず。

○慶賀

○丹桂枝たんけいえだを萌もし、靈芝庭れいしにに生せいず○人生じんせい七十ちちじゅう古來こらい稀まれなり○喜悅きえつの眉まゆを昂あげて○愁眉しうびを開ひらく○祥風萬里せうふうばんり○千門萬戶せんもんばんこ謳うたの聲こゑ○鼓腹こふく擊げ壤じやう○一家團樂いっかだんらく○壽筵じゆえんを開ひらいて南山なんざんの曲まがを奏そうす○景雲けいうん○昭代せうだい○瑞雲ずいうん○合がふ應えんの禮れい○良緣れうえん○相生あひおの松まつ○比翼ひよくの鳥とり○連理れんりの枝えだ○借老かいろの契ちぎり○翠帳すいじやう紅圍こうけいのうち、鴛鴦えんおう相思せうしの情せう○新しん郎らう玉たまの知ちく、新しん婦ふ花はなの如ごとし○琴瑟きんせき相和あひわす。

○吊悔

○鷺折らんをれ、鳳缺ほうかぐ○遠逝えんせい○訃音ふいん○夭折えうせつ○永眠えいみん○易簀えきさく○墓門ぼもん花はな既なに落おちて露つゆのみ滋しし、あゝ我わが恩人おんじんの魂たまは、こゝ九泉きうせんの下もとに在いませる

ものを○魂は九天に散じ、魄は九泉にさまよふ○昊天、何ぞ情なき
人をして死別の恨あらしむる事や、墓前涙を垂れて空しく幽魂に
慰ふ○故郷の慈母、病篤しと聞く、千里、汽車に乗じて馳せ返
れば、あゝ、天無情、温顔既に化して白玉樓中の人。

○憤 怒

○虎髯逆に立ち、怒聲門外に徹す○叱咤の聲、四隣に震ふ○憤
怒の形相さながら夜叉の荒れたるが如く、閻羅王の囚人を鞠問する
に似たり○怒髪、冠を指し、階下に卻立す○激怒勵聲さながら
傍人なきが如し。

○君 臣

○聖恩優渥○皇家の元良○寵遇○輔弼の老臣○托孤の功臣○君
命を泰山の重きに比し、身命を鴻毛の軽きに比す○上には金甌飲く
るなくして萬世一系の皇室いや榮耀に榮耀まして、下に忠勇の五千
萬人おのゝ大和心を激勵する、あゝ、これ我が花櫻園にあらずや
○一國争臣あれば國家安し○四方の民草○蒼生草○世に四恩あ
り、皇恩を最とす○恩波かぎりなくして、忠臣雲の如く起る○儉
勤、民を養ふは聖主の情、忠良、君に奉ずるは賢臣の心○君は舟也
臣は水也○良將を卒伍より抜き、賢佐を黎民より擢す○上に聖主

あり、下に賢臣あり、國以て安く、民以て安し。

○親子

○殿父○慈母○先考○先妣○舅姑○養父○養母○繼父○繼母○嫡子
○庶子○雛嫁○女婿○稚兒○嬰兒○祖父○祖母○曾孫○曾祖父○曾
祖母○玄孫○義子○子ゆゑの闇○おもひ子○焼野の雉子、夜の鶴○
子孫はこれ祖先の枝葉○袖は寒き夕も、子のためには衣と被ふ○家
に争子あれば、その家必ず正し○父の腹、母の鬘、しかも孝子は
煎々として收めて姦に格らしめず○父、父たらずといへども子以て
子たらざるべからず○忠臣は其の主君に情あり、孝子は其の双親に

情あり、而して節婦は其の所天に情あり○覆育の恩、海それ淺し、
鞠養の愛、山それ低し○蒼々たる天、この際涯を知らず、これ父の
愛也、茫々たる地、その極まるところを見ず、これ母の愛也。

○夫婦

○良人○所天○郎君○配偶○連理○比翼○偕老○琴瑟和諧○糟糠
の妻は堂より下さず○君が箕帯の妾とならむ○戀鳳の契○火の中
水の底へも共に入り、共に沈むかぎりある、別路までも、おくれ先
だゝじとこそ思ひしに○天地は唯我等が愛よ○縁合して暫らく親し
みを爲すも、一朝事起れば、終にこれ路傍の人○語に曰く、富家の

女は、嫁し易く、貧家の女は、嫁し難し、富家の女は嫁するに早くしてその所天を軽んじ、貧家の女は嫁するに遅くしてその姑に孝なり。

○兄弟 (姉妹)

○兄弟の多きは、兄弟そのものゝためには、いふべからざる幸福なれど、親の身に取りては、それより心づくしなるものはなからむ○姉と妹との愛情は、男の兄弟の中にていふ愛情の他に、また一種の愛といふもの、一種の情といふものあるならんか○おのれら兄弟その性質一ならず、そのうち最もかはりたるは末の弟なり、豪放

疎暴たねて、人のいふなきかず○同胞○連枝○阿兄○家兄○舎弟○長姉○少妹

○朋友

○故郷○舊友○友誼○友情○交誼○交情○刎頭の友○金蘭の友○水魚の友、傾蓋の友○友垣○幼少竹馬のむかしより刎頭の交深く○つはものゝ交りたのみある、中の酒變かな。

○美人

○雲霞花顔、金歩搖き、芙蓉の帳は暖かに春霄を渡る○、渠は

虞氏西施が容貌をかれ、衣通姫小野小町が秀麗に似つ○桂の摺箔
 は差明きまで春の日影に輝き、さと滴る衣の香に梅のにはひも
 氣壓され、なよやかなる緑の髪に柳も色なき心地せらる、玳瑁
 の笄は頭上の花髪と見ゆれど更らに萎める憂なし○衣香扇影○わ
 らひをかかくす袖屏風、半開きなる緋櫻に、霞のかゝる如くなり○容
 貌固より玉を欺く巫山の神女が雪となりし夢の面影をとゞめ小野
 小町が花に比へし歌の風情を残せり○花辰、鶯の聲を欺き、柳腰
 燕の輕きに類す○花に類ふべき容なるも麗客のあらしにさそはれ
 月と見なす貌は玉簾の雲にかくる○錦帳を垂れて花の紐とき、朱簾
 を捲きて月の眉を畫く○深窓にありて綾羅を身に纏ひ、幽闇に臥し

て蘭麝を衣に蒸らす○綾羅を切て方菌となしては朱房玉樓のうち
 に眠り、錦繡を截て衣を重ねては紫殿寶閣のうへに遊ぶ○雨にぬれ
 たる桃眼露に咲み、嵐に亂れたる柳髪なだらかにたれ、羅綾の袂
 鮮かに錦繡の裾斜なり。

○軍人

○羸馬繩鞭○白馬銀鞍○威風堂々、美髯漆の如く、馬上に叱咤す
 れば三軍手足の如く動く○英姿爽颯、胸間の勳章、燦として將軍
 の功名を語る○胸間には黄金の勳章の輝くあり、腰間には銀色の
 長劍、憂として鳴るあり○鞍上の將軍はこれ當代の英傑、鞍下の

駿馬はこれ東奥の逸足○長劍を抜き、高く右肋に捧げて號令一番
 すれば、縦隊の兵、忽ちに圓陣となる○赴々たる武夫は公侯の干城
 ○一將功成りて萬骨枯る○百萬、敵、何かあらむ、忠を據べ、職を盡
 し、死に瀕みて渝らず、一死報國の武夫まさに茲にあり○紫髯髯
 として古貌の氷稜たる一將軍○遠征の兵士は半冬、半夏の服装にて、
 背囊を負ひ小銃を肩にし、外套を擔ひ、銃劍を帯び、彈藥を携へた
 り○義氣忠膽金剛の不壞なる我神州男兒は、日御旗の風に志を
 奮ひ、滿洲の雪を心に念しつゝ、銃口天を指して亂れず、健脚地
 を踐みて挫けず。

○性 質

○冷淡ながら氷の如し○貪戾歴くを知らず○渠は陰險の人、外
 貌菩薩の如く、内心夜叉の如し○詔諛これ事とす○優柔不斷何の
 なすなし○英邁の資、卓絶の才、これを望めば光風の如く、これに
 付けば霽月の如し○卓犖不羈○公明正大にして清廉勤恪○渠は
 温厚篤實の士也○その胸襟洒落に、光風霽月の如し○理
 想高潔にして、しかも識見超邁○機に望み、變に應ずるの才○
 膽力一世を掩ふ○勇猛果斷、事に臨みて機智縱横○偏僻にして
 時潮を見るの明なし○輕舉、事を誤るの虞れあり○因循姑息、時

勢の風潮に後る○機智明敏にして慷慨國を憂ふ○度量、海の如し
○羨望の念、止みがたし○豪胆、四海を呑む○沈着謹厚、人君
の量あり○輕佻、事を破る○幼少にして克己の心あり○同氣相求め
同病相憐む。

○舉動

○甘んじて權門の奴隸となる○この腰、敢て五斗米のために折らす
○舉動敏捷、錐を囊中に盛りたるが如し○盤根錯節に遭ふも
風せず、百事を處理する、恰も快刀亂麻を切るが如し○外剛に内
和に、その操行殿肅、一點の浮華なく、半片脂粉の氣なし○渠

は口に密あり、腹に劍あるの徒也○誦詐以て陰匿し、權謀以て私曲
を營む○風雲を叱咤し、狂亂を反す○舉止端正。

○訓戒

○忍び得べきを忍ぶ是れ常人也、偉人に到つては能く忍び得べか
らざるを忍ぶ、故に成功す○男子世に立つ、寧ろ雞口となるも牛後
となるなかれ○獨立して獨行せよ、汝が計畫の大事業は、その意氣
によりて成功せむ○幾夕の風浪と險礁とを経て、こゝに希望の彼岸
に達し得べし○行路の難は山にあらざる也、海にあらざる也、唯そ
れ人の世に處するの間にあるのみ○百折撓まず、千挫風せず、斃れ

て後に已むの精神を鼓舞せよ○見よ、流るゝ水は常に清鮮也、されば汝、よろしく労働せよ、幸福と長壽とはその労働が汝に興ふるの功果也○汝、男子、正義に仗り、自由を重んじ、真理のありところ、勇み進んで水火も辭せざれ○氷雪の艱、嚴寒の苦を忍びずんば、千紫萬紅の春は來らざる也○爾、遂げがたしと思ふことは、斷じて契約すること勿れ○晝眠るものは夜飢ゆ○一矢折れ易しといへども、十矢を束ねれば折れ難し、一致なる哉、協力なる哉○見よ、巍々たる埃及の金字塔、また見よや蜿蜒たる萬里の長城その城も、その塔も、これ豈勤勉の結果ならずや○己れを愛するの心を以て人を愛し、人を責むるの心を以て己れを責めよ○爾、事

業を成し遂げんと欲せば、よろしくその全力をあげて、これに従事すべし○驕奢は身を亡ぼし家を破るの斧鉞也○苟くも善ならば小なりともこれに與せよ、苟くも悪ならば小なりといへども爲すこと勿れ○至誠は千載に働き、功業万古に垂る○虎は死して皮を貽し人は死して名を貽す○誠實と勉強とは不易の友也○時は金也、金は權也○悲むものと俱に悲しみ、喜ぶものと俱に喜ぶべし○健康は人間最上の者也○一忍以て百勇を支ふべく、一靜以て百動を制すべし○心の修養の必要なるは、猶肉体に食物の要あるが如し○徐かに急げ○人生は農夫也、世界は耕園也○天才貴ぶべしと雖も、品性は更らに貴し。

(時) 變

▲戰 鬪

○陸 戰

○三略の傳、八陣の法○奮擊突戰秘術を竭す○千變万化の太刀
 風○端武者は遠箭に射て落す○進むも退くも一騎打○逃足つきし雜
 兵等○尖き大刀風、撃合ふ鏗音○修羅の巷○稻麻の風に戦ぐ如
 く勢さながら破竹に似たり○大砲小銃、雷轟電激、坤軸爲めに
 震ふ○天地を撼かす呐喊の聲○戦へば必ず克ち、攻むれば必ず取

る○濠を深うし壘を高うす○肉薄して城に迫る○一以て百に當らざ
 るなく、敵爲めに披靡す○長駟して敵を追ふ○叱咤追馳、射てその
 右額に中つ○千軍万馬を往來して場敷を經たる老武者○城を抜き
 陣を陥る○刀折れ、力竭き、肝腦まさに地に塗れんとす○七離七
 合敵を逸す○硝烟濛々として天日爲めに暗し○雲霞の如き敵軍
 ○旗鼓堂々、隊伍整々○全軍枚を啣みて敵營を襲ふ○海には戰艦
 陸には精銳○劍戟林の如し○援兵到らず、孤軍重圍に陥る○帝
 釋修羅の道場にて三軍の士、死を視る歸する如し○利鏃、骨を穿ち
 驚沙面に入る○勇ましき哉、白兵戦○一齊射撃して敵を斃す
 こと無數○奪ひ得たり敵の聯隊旗○塹壕を穿ち鹿砦を構ふ○斥候

隊の一人、月に向つて立つ○兵氣沮喪して將は傷き、軍爲めに破
 る○殊死して戦ふ○敵に鐵條網あり、我に機關砲あり○刀折れ
 矢は盡きて、身存はる○豫定の勝利は既に獲得あり○我軍、こゝに
 凱旋す○吁これ金城鐵壁也、一夫これを守れば万夫も陷る能
 はす○疾きこと風の如く、徐なること林の如く、侵掠火の如く、動
 かざること山の如し○鮮血は野逕の草の葉を染め、軀は彼此に算を
 案して馬蹄の塵に埋む○十文字に蒐通りつゝ、巴疾に取て返し、鶴
 翼に連なり、更らに魚鱗に透る○鷲鳥の燕雀を撃つ如く、旋風の
 沙石を巻くが如く、呐喊一聲突崩す○鎧の袖を落り脱け、先を争
 ふ味方の剛者○兩虎の山に戦ふ如く、鷲鳥の肉を争ふに似たり○こ

の役や、敵、倉皇として退却し、その彈藥銃器、悉く我軍の
 勝利品となる○飾り立たる數張の弓弦は壁に畫ける瀑布の如く、掛
 わたしたる鎗、刀は春の外山の霞に似たり○はや亂れ入る數萬の
 人馬、あはれ妙法弘通の盛場、忽ち修羅の巷と變つて、降るは血
 の雨、響くは鐸音○本能寺の藁をつゝんで渦まき上る一團の黒烟
 り幾千の英魂むなしく灰燼と消れて、慘風長へに悲し○萬里の糧
 をつゝみ、徒歩の師を帥ぬ、天漢の外に出て疆胡の域に入り、五千
 の衆を以て十萬の軍に對し、疲乏の兵に策ちて新羈の馬にあたる。

○海 戦

○戦艦海を掩ひ、喊聲浪に震ふ○海を血汐に染めて敵屍漂ふ○皇國の興廢、繫つてこの海戦にあり○吹く風、立つ浪、敵艦爲めに漂蕩す、吁これ實に天佑也○濃氣深くして、こゝに再び敵を逸す○三十餘隻の敵艦隊、轟沈せしもの二十隻、逸走せしもの二隻、残る十數隻は我が捕獲するところとなる○十字の砲火を冒して眞一文字に進みゆくは、死を極めたる閉塞隊の勇士也○矢を射る如く水を潜りし水雷艇、轟然一發命中して、敵艦烟に包まれたり○浪は甲板を浸して飛沫高く艦橋に及ぶ○敵は日没より探照砲火を以て極力防戦す○我が旗艦より放ちたる三十番の巨弾は敵の旗艦に命中せり○敵艦、擱礁して沈没す○この日、朝來西南の

強風浪を揚ぐるごと高く、小艇の操縦大に困難を極む○我が艦隊は敵の後尾に旋撃して、その右方に出で、更らに並航戦を試む○一水雷は敵艦の左舷後部に命中し、須臾にして艦隊十度許り傾斜するを見る○見よ敵の旗艦は、一檣一烟突を失ひ、全艦烟燄に包まれて、操縦する能はず、○敵の一艦、後部水線に近く三彈を受け舵機を損して浸水甚し○豫定の如く、數隻の哨艦を南方警戒線に配備し、以て敵の動靜を伺ふ。

▲天變地異

○海嘯

○半夜人定まり、余も枕に就く、夢を破る一聲、八幡山の寺院にて
 早鐘を突き始めたり、耳を欲つれば北上川の堤上に當つて雷々
 たる人聲、何事ならんと余は臥戸を出て、戸を開いて北上川を望
 めば、激浪澎湃として凄まじき水音、堤上には處々に大篝火
 を燃き、數百の丁壯皆土俵を肩にして東西に奔走せり、雨は少
 しく止みたれども、風は大木を倒さん勢、天は暗し、夜は方に半
 ばを過ぎたり、既にして河水の俄に奔騰する音、憂然として耳を打
 つ○濁浪百五十尺、灣頭の崖を衝いて山の如く崩れ來るところ、家

も人も骨灰微塵なるべし○古來、海嘯の事を記せるもの、その數一
 にして足らざれども人皆倉黃恐懼の際なれば、その見るところ詳
 かならず、隨て語りて精しきこと能はず、或は神怪奇異信すべか
 らざるの事をさへまじへ述ぶるもの少からず、由りて以て當時のさ
 まを想像すべきもの、幾んど希なり○崖の上の松を越して、沖の小
 舟の矢の如く人家の上を走り來るを見たり、しかも其浪は一種の異
 光ありて、物凄かりしこと言語に絶す○さながら百雷一時に落つ
 る如き響と共に闇を衝て驟と押寄せたる千丈の大濤○眉月沈まんと
 する時、浪俄かに高きこと百尺、暗潮異光ありて、漁夫の遠く沖
 にあるものは、我が村に火事ありしかと疑ひぬ○海嘯忽ちに瀕

海を洗ひ去て、親は子を失ひ、夫は妻を亡ひ、昆弟親戚相顧るに違あるなし、臂を打ち、足を摧き、膚を破り、骨を碎き、僅かに身を以て免る。○凡そ瀕海の地、大樹を折り、巨巖を轉し、堤防を崩し、丘陵を夷ぐ、潮去るの後、兀として平原の如し。○山の如き怒濤、猛然として襲ひ來り、萬物悉く捲き去らぬ。○水の泡の如くと喩へたる、其ことは眞にして、三萬餘人はたゞ目ふる間に藻屑となりぬ。

○洪水

○新水門を過ぐれば新に現出せる一面の湖水、昨日までは玄田毎

々たる一沃土たりしなり。○波に漂ふ人家の器具、木材、障子、襖の類、飄蕩たり。○川の對岸より堤が切れたく、幽かに聞ゆる叫び聲落寔たる乾坤、哀れにも亦物凄し。○雨霽れて黒雲の絶間に月ほの白みたり、處々に立たる、高張の明は、眼のあたり赤く、四方に黒布を引いて漲る水は、隨處、龜甲形に散り、波を立て、ざぶり／＼と山の裾を洗ふ。

○地震

○山崩れて川を埋め、海かたぶきて陸を浸し、土さけて水湧きあがり、巖われて谷にまるび入る。○地震ひ、家の破るゝ音、雷に異な

らす、家のうちに居れば忽ち打ちひしがれんとす、走り出づれば地
われ裂く、羽なければ空へも上るべからず、龍なられば雲に上らむ
ことかたし○山谷震動して四面晦冥○地裂け川あふれて、家こ
となく潰れ、人悉く死す○大地動いて家も倉も倒れぬ、まして
や火は各所に起りて焔烟天に漲り、號哭の聲、悲鳴の叫び、さな
がら現世の地獄は是○灰の雨の絶間々々には大地の鳴動する音、海
水の高嘯する響、さては遠山の地層より噴山する瓦斯のひびき
○雨りたる灰は膝を埋むるほどになりぬ、火山より噴出す熱湯の雨
は、息をも塞ぐべき瓦斯を運びて人家を目かけて来る、巖石の碎片
は市街に堆積して道路爲に塞がる。

○火災

○半鐘は貴太鼓、のぼせ上るほど打ちつけければ、それに連れて無
情の風の神、おもしろさうに躍り廻り、荒れに荒れたる火炎、世界
の果までもと狂ひ立つて、燃の上る家凄まじく鳴り響き、眼前の火
宅、昨夜の夢はまたく内に灰となる○火消人夫の勢は腕に影り
たる俱利伽羅龍の、今にも雨を得て上天せんす有様にて、威氣揚
々として道を行くにも肩を以て風を切り、遂に町火消の纏は、銀箔
を抹りて大小二本を用うることとなりしが、寛政の儉約令に禁止
されぬ○さしも廣大なる家も一夜忽ち灰燼となる、金銀財寶珠

玉ぎよくの類るるより、書畫しよわく骨董こつどう古文書こぶんの類るるまで、悉ことごとくく烏有ういうとならん。○火ひの粉こなまじりの灰はいは、つと空中くうちうに飛とんで、雨あめの如ごとく舞まふて落おつ。○土蔵どざうは、一ひとつ落おち、二ふたつ落おち、見みるく三みつまで焼落やけどぬ。○金きん頼くづれ朱傾しゆかたきて堂どうと倒たはれつ、烈風れつふう一いち陣ちんさつと來きたれば、烟けむ交まり灰交はいまりの火花ひまなの柱はしら、空くうを冲ついてまたばら／＼と降ふりくる火あめの雨さんご。○珊瑚さんごの柱はしら、黄金こがねの瓦かはら、きら／＼と紫むらさきだちたる焰まゆのうちひつめに閃ひきて吹ふく風かぜに、紅くれないの花はな飛とび金の雨あめ滴したる。○烈風れつふうは伴ともはれて火くわ焰えんは凄すさまじく音おとたて、一いちの字じに渦うづまき、「し」の字じに狂くるふ。○闇やみを染そめぬく紅くれない烈火れつくわ一團だん。○火ひは爆ぶつと燃もに立たつて忽たちまちにうつる障子しやうし、白紙はくしを紙なむる紅くれない舌したちよろ／＼と瞬またくまに燃もむ。廣ひろがりぬ。○火ひの手ては早はやや縦横ちゆうわうにひるがりつゝ、納屋なやの内うちに亂みだれ入いれば、噴はきいづる黒烟くろけかりうつの渦あるひうつ、或あるは頹たれ、或あるは煙えんみて、闇やみは焰はつに破やられ、焰はつは烟けむに揉もみ立たてられ、烟けむは更さらに風かぜの爲ためめに碎くだれつゝも、蒸むしだいきほひおひたよ。勢いきほの夥おひたよ。

○飢 饑

○米こめの登ある、平年へいねんの十じゆが一おにも及およばず。○禾稼くわかみのらす、年大としおほいに饑うゆ。○庫くらに満みつるの金かねあるも、以もつて一いつ粒りゅうの米こめを得えがたし。○比年ひねん、穀こく實みのらす、民飢たみうえに泣なく。○老幼らうちゆう相抱あひいだいて飢うゑに叫さけび、父子ふしともに擁やうして食しよくなきに泣なく。○人飢ひとうゑて死しするも葬ほうむらす、餓うゑたる犬いぬは群ぐらがり來きたりて、その尸かばねを食くり食くらふ。○水みづを飲のみて朝あ食うしよくに代かへ、土つちを煎せんじて晚ばん

餐とす、隣れむべし、地に一粒の穀なく木皮草根既に食ひ盡しめ。

(性格)

○ 忍 耐

東風に清香を放つて、千紅萬紫に魁だつものはこれ氷雪の寒に堪へたる南枝の梅也。人の世にある亦同じ○忍び得べきを忍ぶ、これ常人也、忍び得べからざるを忍ぶ、非凡の人にあらすんば能はず。○歳寒うして松、柏の凋に後るゝを知る、盤根錯節に遭ふて利刃始めて照はる○人の忍ぶ能はざるの辛苦を忍ぶもの、これ人の爲す

能はざるの事業を成功するの人也。

○ 儒 弱

○人生、意氣の欽すべきなくんば、むしろ死するに如かざる也。○語に曰ふ、遊逸は家を頼し國を亡すと、然り、懦弱して物に耐ふるの意氣なきものは、終に名を成すこと能はざる也。○滔々たる世間、懦弱の輩多し、願くば渠等の頭腦の向上の精神を注がん哉。○千挫風せず、百折撓まざるは丈夫の意氣也。懦夫は事に臨みて躊躇逡巡、敢て發憤せず、敢て激勵せず。○懦夫の胸中には、羨望の思あり、眷戀の情あり、猜疑の心あり、嫉妬の念あり、而して寸毫も向

上じやうの精神せいしんなく、一點てん欽仰きんぎやうすべき意氣いきなし。

○篤とく 實じつ

○信しん、以て人ひとを服ふくし、徳とく、以て人ひとを懐なつく、至誠しせい篤實とくじつの人ひとにあらずんば能あたはず○事ことに臨のぞみ、業げふに向むかふて篤實とくじつなる、これ成功せいこうの秘ひけつ訣なり也○汝なんぢ、篤實とくじつと遲鈍ちどんとを混こんする勿なれ、至誠しせい事ことに從したがひ、篤實とくじつ事ことを處しよするの人ひと、能よく大事だいじを成なすの士し也○平素へいそ篤實とくじつなる人ひとを目めして遲鈍ちどんと嘲あざける勿なれ、一旦たんくわん緩急くわんきやうあらば、措置さちよ宜よろしきを得うるは、平時へいじ必かならず篤實とくじつなる人ひと也○

○浮う 薄はく

○義ぎの爲ために身みを犠牲ぎせいとするものものを嘲ちやう笑しやうし、利りの爲ために親戚しんせき故こ舊きやう互あひに相あひ反はん目もくす、これ浮薄ふはくの徒との常つね也○人心じんしんの傾向けいこう、漸せんを追おふて輕浮けいふとなる、見みよ、禮儀れいぎ廉耻れんぢを説とくもの漸やうく稀まれに、情誼じやうぎの薄うすき、と紙かみの如ごとく、誠實せいじつの氣風きふう全ぜんく絶たえて、射利しやりの僥倖ぎやうかうするの徒と、まさまに社しゃ會かいに遍あまからんとす○男子だんしは廉耻れんぢを破やぶり、女子ぢよしは節操せつそうを賣うる、而しかうして滔々たうたうたる世上せじやう、これを見みて以て賢けんなりとす、敦厚とんこう淳朴じゆんぼくの氣風きふうは地ちを掃はらふて、輕佻けいてう浮薄ふはくの俗ぞくとなる、この澆季けうきの世よを奈何いかなせん。

○沈着

○沈着、事を處す、恐らくは蹉躓なからん○沈着にして剛毅、凜然として犯すべからず○語に曰ふ、功の成るは、成るの日に成るにあらずと、然り沈着は成功の母也○汝、事に臨みて須らく沈着なるべし、沈着なれば思慮周到也、思慮周到なれば變に應じ機に際して、敢て周章せず、敢て狼狽せざるべし。

○輕躁

○渠や、堅忍持久、以て事に從はゞ、一生の目的まさに成るべきを

一朝輕舉時機を失し、一敗地に塗れて、また起つべからざるに至れり○浮華輕佻、機を見るの明なく、人言を信じて輕々事に從はんとす、終に蹉躓を免がれず。

○温厚

○度量寛厚、衆を容る、語に曰ふ、泰山の土壤を譲らず、河海は細流を撰ばずと、眞個に然り○謹厚にして公平に温藉にして雅量に富む○外和に、内剛に、善く謀り、善く斷す○人に接する温厚、君子の風あり○その徳や崇く、その望や重し、温容迫らずして言辭懇篤に、事に望みて疾言せず、遠色せず、綽々として餘裕あり

人その威信に服す。

○ 殘 忍

○外面、菩薩の笑を含み、内心、夜叉の毒を包む○渠や、殘忍にして酷薄なる、恰も叢間に隠れて人を噛まむとするの蝮蛇に似たり○聞く、古に妊婦の腹を刳いて其孕兒を挾出したる王者ありしとまた聞く、僧侶の背を割いて鉛の熱湯を澀ぎ込みたる藩主ありしと渠の殘忍なる、この二者に過ぐ。

○ 果 斷

○快刀亂麻を截ち、天馬空を往くが如し○猛進果決、以て事に臨む、異論も道を遮る能はず、群議も言を挾さむ餘地なし○勇壯直進、事に臨んで斷々乎たり○勇猛果斷、機智縱橫、盤根錯節に遇ふも敢て退避せず。

○ 優 柔

○優柔不斷、機宜を誤り、終に墜子の名を成さしむ○非凡の人は、人に先つの見あり、優柔雌伏を甘んずるの徒、終に何の成果を收むるものぞ○語に曰ふ、むしろ鶏口となるも牛後となる勿れと、男兒苟くも世に立つ、斷じて優柔の誚より免かれよ。